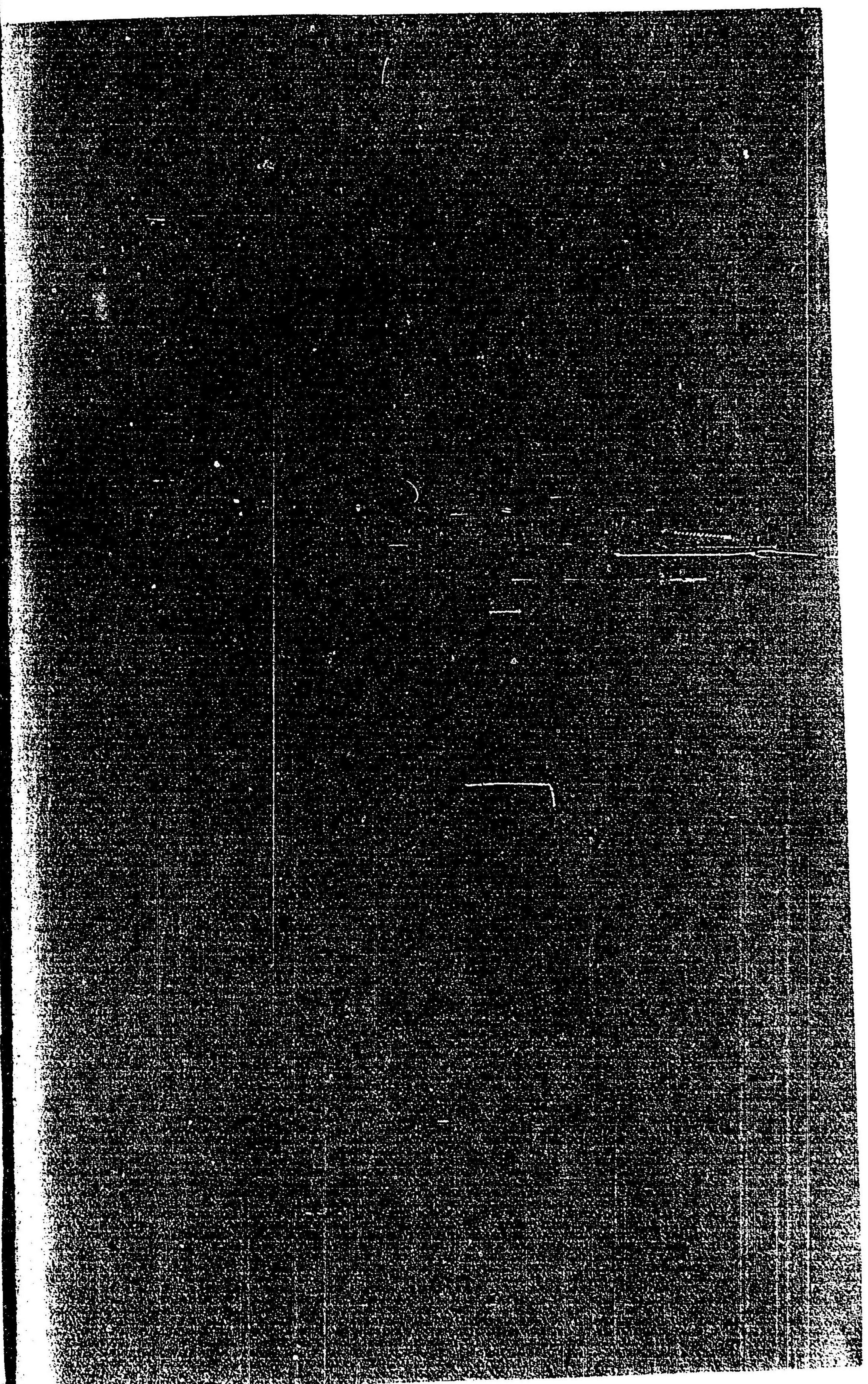




デ  
ョ  
サイ  
ア  
、  
ス  
ト  
ロ  
ン  
グ  
氏  
原  
著  
石  
川  
三  
四  
郎  
譯

# 廿世紀の大覺醒

東京 日高有倫堂發兌



# 序

○本書の原著者チヨサイア、スツロング氏は、北米に於ける基督教界の先輩なり、氏は、學者としてよりは、寧ろ社會改良家として、其名最も著はる、平和運動に、市政問題に、貧民問題に、凡そ北米に起れる基督教徒の社會運動に氏の名を見ざるは殆んど稀なりとす。

○而も、氏や、實際運動の上に有力家なると同時に、著作に於ても亦た大に成功せるの人なり、其著 Our Country は最も有名なるもの、北米合衆國を組成する一切の社會現象を整序評論して餘蘊なく、人をして、其の社會事情に精通し、其の論斷の明快なるに驚嘆せしめたり。

○本書は即ちスツロング氏の最近著作にして、原名を The Next Great Awakening と云ふ、之を『二十世紀の大覺醒』と翻譯せるは、

蓋し原名と多くの徑庭無しと信じたれば也、然れども其内容を言へば主として耶蘇が社會的の理想教訓を解説鼓吹せしもの、今ま之を一目瞭然たらしめんが爲に別名を附しぬ。

○本書の原文は、流暢明快を極むと雖ども、譯文頗る拙劣なり、是れ原著者に對して僭越の罪甚た淺からざると共に、讀者諸君に對して予の深く耻づる所なり。

○原書に於ては、第六章と第七章との間に『受用せられざりし耶蘇の社會訓』の一章ありたれど、之を削除し、別に卷末に余の舊稿を附して之を第九章第十章となし、以て予自身の意見を明かにせり、スツロング氏は社會改革家なるも、社會主義者に非ず、是れ社會主義を以て自己の主義とする吾輩が、此に一言を附加せざるらべかざる所以なり。

○明治三十八年九月五日、彼の『焼打事件』爆發の結果として、日本社會主義の機關たりし我が『直言』は發行停止の嚴命に接す、余、爲に聊か閑日時を得たり、本書翻譯の稿、實に此の間に起れり、然るに十月に至りて平民社は遂に解散の運命に達したり、此に於て、余は安部、木下の兩先輩と共に新紀元社を創立するに至る、經營の事務極めて繁忙なり、本書の起稿、亦た第六章に至りて全然中止となりぬ、適々本年四月中、親友小野吉勝君の助力を受け、辛うじて脱稿するを得たり。

明治卅九年五月三十一日、綠蔭深き角筈の里、狹小なる新紀元社の、編輯室、書齋、應接間、寢室を兼ねたる、而も新清なる微風に薰る六疊の室に於て

# 廿世紀の大覺醒

## (一名耶蘇の社會訓)

### 第一章 世界の最高要求……………一

吾人の思想の弱点 || 世界の要求 || 宗教の形式と精神 || 時代と宗教 || 眞の豫言者 || 精神的覺醒 || 近代に於ける宗教の妨害 || (一) 物質的進歩 || (二) 思想の科學的傾向 || (三) 自然法の權能 || 何れも皆宗教の侍女也

### 第二章 精神的復活の法則……………一七

智識的と道徳的との差異 || 個人の慣習と其革命 || 社會の慣習 || 物質的知識發達 || 精神的復活 || 十六世紀 || 十七世紀 || 十八世紀 || 十九世紀の前半期 || 十九世紀の後半期 || 各自の使命 || 現時の問題

### 第三章 神國 (耶蘇の社會的理想)……………三五

立地と對象 || 基督の立地と天國 || 天國の解釋 || 第一の解釋 || 第二の解釋 || 第三の解釋 || 第四の解釋 || 半面の眞理 || 天國の定義 || イスラエルの思想 || イエスの宣言

第四章 神國（其の外延及び内包）……………五四

學者の説||物質||天と地||神の法則||科學の効||自然法と樂園

第五章 神國（此の教理の結果）……………六六

(一)天國は精神と物質との構成体にして此二者の相互の關係は多くの舊式なる爭論を醸生す||二)真正なる天國の教理は神と自然法則との關係を闡明す||三)真正なる天國の教理は所謂俗事をして神聖ならしむ||四)神國の真正なる教義は教會の眞使命を明確ならしむ||五)天國の眞教義は希望ある大鼓吹を與ふ

第六章 耶蘇の社會法……………八四

社會訓の實現||根本的三原則||一)勤勞の法則||商業上の勤勞||勤勞の目的||二)犠牲の法則||十字架の意義||犠牲の精神||宇宙一休||此の法則の範疇||三)愛の法則||無私の愛||私慾||動機及び其自覚||眞の榮光||相愛

第七章 耶蘇の社會訓は社會救濟を齎す……………一一三

改革と革新||發達の二要素||社會的自覚||社會的良心||社會問題||權利の義務||私慾の撲滅は急速なる解決方法也||實例

第八章 耶蘇の社會訓は精神的復活を齎す……………一三三

現時の教會||精神的復活||天國の眞觀念||科學的觀念||物質的要求||吾人の希望||先づ實驗せよ||神實現の時

附 録

基督教徒活動の新方面……………一四五

(一)自由の歴史||二)第二の封建制度||三)活動の新方面||四)クリスチャンの安心  
平民の覺悟……………一五二

(二)緒言||三)何故に宗教を説くや||四)何故に社會革命を叫ぶや||五)社會主義は自力我慢の説なりや||六)何故基督に執着するや||七)二千年五百年主義||八)感慨無量||九)餘記

# 廿世紀の大覺醒 (耶蘇の社會訓)

ヂョサイア、ストロング氏著

石川三四郎譯

## 第一章 世界の最高要求

世界の最高要求は實在の神なり。假想の『偉大』に非ずして、『我』の偉大なることなり。昨日の神に非ず、明日のにも非ず、實に今日の神なり。『彼處』の神に非ずして、常に『此處』に在る神なり。日曜日の神に非ずして、日々の神なり。

△吾人の思想の弱點 古の、イスラエルや、エジプトや、アッシリアや、バビロンや、ギリキヤ、ローマや、に對する神の攝理を考ふるは易くして、今の、英、米、日、露の諸國を支配し審判しつつあるの神を考ふるは難し。アブラハム、モーゼ、及

び、ダビデ等が、神に對して人格的關係を保持せしことを想ふは容易なれども、神が吾人の一生の主宰なることを信ずるは難事なり。是れ吾等の思想に於て、神は、此處よりは彼處に多く現はれ、此時よりは彼時に多く働くものとなし、空間と時間との上より之を制限するが故なり。

吾等は、神が、大なるものに在ることを知るは易しと雖ども、小なるものに在るを知るは難し。太陽系の造主たり統治者たるを認むるは易けれども、微分子の其れなるを認むるは難し。神が、大統領、皇帝等のものなることを思ふは易く、平民のものたることを考ふるは難し。蓋し是れ吾等に一の忘却せることあるなり、他なし、無限の小と、無限の大と、共に等しく吾等を超越して存することを、而して是れぞ、無限なる智識及び力の對象なることを。然り、神は實に、彼の如く此にも等しく居ますなり。

△世界の要求 神に對する世界の要求は、神の確實なること是なり。宇宙的なること是なり。現在することは是なり。唯だ人は、他の事物に就て無自覺なる如く、之に就

ても無自覺なること屢々之あり。彼等は自ら要求することを知れども、而も多くは其の要求が『神』なることを知らざるなり。又、其の『神』の要求が、人生の廣きが如く、人情の深きが如く、廣且つ深なるを知らざるなり。

然り、此の『神』の要求が人の自覺に入りて、此に宗教の始源をなす。宗教は、神を捕捉するの正しさと強さに應じ、又人の品性と活動とが神と調合するの度に從ひ、彌々確實、靈活に赴くなり。

靈活なる宗教は常に神を實現す。然るに不信者、俗人は、實際に於て神を拒否するなり。而して、神無きが如く生活し、神の存在てふ宇宙の大事業を無視して顧みざるなり。是れ固より世界に於ける大誤謬と云はざるべからず。

△宗教の形式と精神 宗教の儀式、教則、及び禮典は、其の始めは固より神來の鼓吹を受けたる信仰と感情との眞面目なる表章なりき。されど一の行爲に執着するは聽て之を以て一の慣習となす所以なり。一度びは目的と意味とを充てる行爲も、遂には

單に自動機械の運轉するが如くなり、而して其の行爲若くは言語は始めの目的と感情とを有せざるに至り、茲に總て無意味のものと化するなり。かくて信仰生活の表章たる形式は、常に唯だ化石となりて危険の底に落つるなり。

勿論、宗教は機械的に非ずして活けるものなり。形體に非ずして生命なり。法式に非ずして實質なり。秩序に非ずして精神なり。故に、神の曉悟より遡り來る所の生命、性質、精神にして消へ去らんか、所謂宗教上の教則、信條、儀式、習慣は悉く皆俗情と同行するに至るべし。されば俗情の勢力を破壊するの道は、唯清新にして且熱烈に神を曉悟するにあるのみ。

△時代と宗教 尙、宗教は、時に従つて毎に其の表章の形式を變ずる者なり。是れ其の時の状態に適當せんが爲に外ならず。元來生活は常に其の周圍に適應するを要す。例へば空には翼、地には足、水には鱗、風土には草木と云ふ如き、即ち然るなり。故に若し周圍にして眞に變更せんか、生活は亦必ず之に適應せざるべからず。然らざ

れば則ち死あるのみ。是れ宗教形式の上に於ても、植物、動物の生活に於けると等しく動かすべからざるの理と云ふべし。固より生命の本質は永久に變らざるも、而も其の形態は境遇の變化に應じて異なるなり。

抑も、神は世界の精神的生命にして、宗教は其の生命の表章なり。其の生命を表章する所の形式は文明の状態に支配せらるゝものにして、其の文明の状態は則ち之を『周圍』と呼ぶべきなり。文明は時代より時代に亘りて變遷す。其所に新たなる思想あり、新たなる生活の法式あり。而して宗教は、其の教則、其の信條、其の秩序をして之に適合せしむるか、然らずんば化石して死に至らざる可らず。

各時代の最大要求の一は、前代より承繼せる教制を活すに在り、而して是れ宗教々制の最上の正理と言ふ可し。再言すれば其の教制は、時代の新要求と變れる境遇とに適應せしめらるゝを要するなり。此の故に、文明の進歩にして大なれば従つて大に、新なる神の曉悟を要するなり。宗教々制を活すべき精神的生命の新興起を要するな



り。

## △眞の豫言者

昔も今も、總て豫言者とは「神」に就ての豫言者なり。彼等は、其の時代と神との關係に就き、一般人よりは、一層明瞭に之を實見するの人たるなり。然り而して此の如くに神を實見するは、即ち是れ神を實現せしむる所以と言ふべし。故に、彼等の使命は、其の實質に於ては各々相等しく、共に人類生活に密接せる神を實現するに在るなり。然りと雖も、眞正なる豫言者の使命は其の形態に於て種々あり、蓋し彼等は異なりたる時代の異なりたる要求に對して常に適應せんとしたればなり。若し夫れ豫言者其人の豫言にして根底より新たなりとせんか、是れ豫言者に非ずして迷妄者なり。而も又、豫言者其人の豫言にして古き形態の儘なりとせんか、是れ亦豫言者に非ずして剽窃者なり。

## △精神的覺醒

總て大なる精神的覺醒とは、神の實體に醒め入るを言ふなり。現在の境遇に密接せる神を實見するを言ふなり。然らば則ち神や實在となりぬべし。精神

的眞理、精神的功德や實在となりぬべし。かくてこそ精神的生命は精神的の力となりて顯はるれ。

吾人の教會が充分なる機械を備ふるに係はらず、甚だ其の「力」を欠けることを見ずや。輾轡機の中央に於て一の車輪あり、されど其の車輪の中には活ける精神を存せざるなり。生命は組織を生ず、されど組織は生命を生ずるものに非ず。實在の神、是れ吾等の教會の要求する所なり。而して吾等は、唯、神を以て人格ありて現在するものとして之に結合するの時、茲に生命と力とを得べきなり。

## △近代に於ける宗教の妨害

宗教の俗情に傾くは、恰も物の重心を打つが如くにして、世界は直に墮落すべきなり。蓋し是れ殆んど一定して異例なき所なり。

是れ固より吾等の時代にのみ特別なるべきものに非ず、然れども近代に至り、靈活なる神の實見をなすことを殊に困難ならしめたる三箇の原因あり。

## (第一)、物質的進歩

前世紀に於ける未曾有なる物質的進歩は物質主義の文明を

生出し、此に於てか、精神的真理は其の光を失へり。多数の人が實在物となすは、見得る物、持ち得る物、秤り、量り、賣り、又は買ひ得る物にてあるなり。機械は人の生産力を数十倍に増加したり。而して此處に驚くべき富の増加を來せり。今日の如く生活の度の高きは曾て見ざりし所にして、古は富不相應の贅澤とせられし事も、今は多数人が日常の用便たるに過ぎざるに至りぬ。而して單に贅澤と思はるゝ事が通常となりたるのみならず、其の贅澤や實に人の肉慾を勃興せしめたり。人にして肉慾的ならんか、到底神をば見るに能はざるなり。嗚呼斯の如くにして物質主義は人を精神的の盲者となしぬ。

(第二)、思想の科學的傾向 前世紀に於て、世は新たなる而も根本的に異なれる思想の傾向を求めたり。其の常用の記號は一の？(疑問)なりき。而して遂に同時代に於ける一般の傾向となれり。是れ即ち科學の法式にして、夫の機械が富を増殖せし如く、實に世界の智力を増進せしめし原因たりき。

科學的傾向に陥れる思想は、權威を尊重せず、獨斷の教條に敵對し、疑惑を獎勵す。智識の殿堂を通過したる此の偶像破壊者は世俗が崇拜する多くの偶像を破壊せり。然り眞に甚だしく夫の舊殿堂を破壊せり。而も異なりたる基礎の上に新たに一の建設をなしつ。

科學的精神は決して信仰の敵に非ず。蓋し科學の發達に依りて、教條の破壊は避く可らざるも、信仰の破壊は偶然なりき。教條と信仰との二者や、其の實質は異れりと雖ども、其の關係は密接せり。信仰は生命の水にして、教條は單に其の水を入るゝコップなり。斯の水や、生命を與ふるものなりと雖ども、而も其の土器を破壊して以て始めて内より逆出するものなり。

神學は宗教の事實の解釋なり。過去五十年間に於ける智識の發達は、此の事實の上に新しき光を投げぬ。而して之が新しき説明を要求しぬ。夫れ銀の溶解せらるゝや、其の形を失ひて再び分解し難き液體となるべし。是れ恰も銀の失はれたるが如しと雖

ども其の全體は尙存するなり。神學は數年の間、溶解の状態にて在りき、而して其の多くの思想は永遠に退き去りぬ。而も其の形骸を失へりと雖ども、其の實質は完全に存續し、以て今や再び結晶せんとしつゝあり。されど教條の消滅が人をして驚愕の感と疑惑の心とを生せしめたるは、素と自然の勢と言ふべし。

(第三)、自然法の權能 敬虔なる精神の喪失せる第三の原因は、自然科學(法則の權能を建立せる)の急激に發達せることはなり。然り、夫の顯微鏡や解剖刀を以て、自然界の中に人格的意思を發見するは不可能の事なりき。

物質的科學の進歩は、物質主義を激勵し科學的法式の價値を宣揚するに、與つて力ありき。而して人の心中に法則の權能を建立して以て、世界より神を驅逐せんとするに似たり。

吾人と神との關係に於て、人格の觀念を喪失するは、敬虔なる信仰の最期とす。人生や、是れ愛の世界なり。個人的の責任なくむば罪惡の觀念ある能はず、個人的の交

通なくむば祈禱ある能はず、個人的の監督指導なくむば神の攝理ある能はず。今の世には多くの才智ある基督教徒ありて、祈禱に應報あること、神の攝理あることを信するは全然迷信なりと思ふ。斯の如くにして法則の支配は神の支配に繼いで來れり、自然法は神と吾等との中間に來れり。而して此の法則は普遍的なるが故に吾等と神との關係も亦個人的なるよりも寧ろ普遍的なるを要するに至りぬ。

抑も基督の宗教の眞の中心、生命は、神の人格に在り。精神的生命とは即ち神と人格的關係を保つに在り。其の言を聞けば、『我に従へ』と謂ひて、或る原理を受けよと謂はず。我は汝に道を示し、眞理を顯し、汝を生命に導くと謂はずして、『我は道なり、眞理なり、生命なり』と宣ふ。基督はパウロの如く復活に就て説明せずして、『我は復活なり』と謂ふ。彼の教訓が人の慰めとなり、力となるに非ず、彼自ら『オ、我は世の終に至るまで常に汝等と共に在り』と言ふなり。而して國民が審判を受けるに際し、其の是認又は譴責せらるゝや、抽象的の規則に依らずして、寧ろ全然人格の判斷

に依るなり。即ち『我は餓えたり、而して汝は我に食を與へたり』若くは『我に食を與へざりき』の如し。

故に、神に對する人格的關係を除去するは、則ち吾等の生活より神を除外し、吾等の宗教を生命無きものとするなり。

かくて、今日の物質主義、即ち、世界の主宰が人格的意思より普遍的法則に變りて懷疑流行する今日の物質主義は、實際的無神主義たる世俗的精神を助勢するに與つて力ありき。人は原動力なくして動く能はず、若し神が實在ならずとする時は、基督教の眞理の挺率は其の支點を失ふ。

△何れも皆宗教の侍女也。さて、上述せる三箇の原因(半世紀間世俗の味方となりて役したる)は、何れも皆宗教の侍女たるに至る可し。

物質主義は富豪、及び其の從屬者のみの特有のものに非ず。貧窮なる蠻人も恐らくは物質の爲に生くるならん、而して又た其の奴隷たらん、而も彼等は他方に於て、物

質以上の善を要求し得るなり、少くとも一種の精神的生活を營み得るなり。蓋し物質は『ヨリ高き自然』に從屬すべければなり。

人に在りては、肉體は精神の敵に非ず。人の生活にして適法ならんか、身體は精神の婢僕たり。精神が表顯する所のものは皆身體を通過し、又た精神に事實の傳達と感化とを受くるも身體を通過す。是と同じく、物質(若くは肉體)の神に對する關係を見るに、之を正當に利用するは決して神の妨害たらざるのみならず、却て一の補助なることを發見せざる能はず。即ち是れ、神國建設の爲にする神の感化を、世界の精神的生活の上に表示するの手段たるなり。然り吾人は知る、前世紀の物質的進歩や、是れ實に神國建立に最も有力なる作用として神の用意を明かにするものなることを。

又、思想の新傾向、即ち科學的法式は、慥かに元氣を痿靡する所の懷疑に陥らしむ。されど是れ進歩に伴ふ必要的損耗に過ぎず、輕信の自然的懲罰に外ならず。蓋し本來疑ふべきものを信するは、適々以て信すべきものを疑ふに至るべければなり。

實在的智識は決して眞信仰に對して危険に非ず。人が明確に自白することを恐る、は、是れ其の人自らの信條を疑ふ所以なり。今や一の新なる信仰は興れり。其の元氣ある所以のものは、聰明なるが爲なり。其の光明を恐れざるは、光明の中に發達したればなり。暗黒又は曖昧の中に存立するは眞の信仰に非ず、寧ろ迷信なり。

“Let Knowledge grow from more to more,

But more of reverence in us dwell;

That mind and soul, according well,

May make one music as before; But vaster.”

此の新なる信仰は理性と衝突せず。蓋し兩者が打ち鳴らす音律は異れりと雖ども而も調和的なれば也。

科學的法式にして、若し獨斷なる教條を破壊せんか、是れ吾人をして基督に歸らしむるなり。基督にある純潔に、基督の教訓の主眼たる神國に、歸らしむるなり。され

ば假令懷疑が活力を萎靡することあるも、眞正なる天國の觀念は人の元氣を鼓吹す。

又、若し、法則の權能の爲めに、從來特殊なる攝理を以て人に臨みし神が除去せられんか、其時、吾等は、別に内極なる神の來臨を正確に悟れることを發見す。斯の神や、吾等をして其の内に活かしめ其の内に動かしめ、其の内に存在を保たしめ、而も又同時に吾等の内に活くるなり。

法則の神は、多情なる神よりも、寧ろ甚だ信頼、崇拜するに値あり。蓋し前者は後者に比して、遙かに能く吾等に認識せられ、實現せらるればなり。基督曰く、「今より後、われ爾曹を僕と稱はず、そは僕は其主の行すことを知らざればなり、我さきに爾曹を友と呼り」(約翰十五章十五節) 純粹なる神の法式たるべき自然法則は、過去に於ける神の活動の歴史を吾人に談り、將來に於ける神の希望の多くを吾等に默示し、かくて吾等を神の友として其の組合内に入れ、而して共に神國を建立すべく、吾等をして聰明となり、共働者となるに適せしむ。

此に於てか思ふ、今日に於て要求せらるゝ所のものは、今日の智識に應ずべき言語を以て人に神を説明するに在り。吾等現在の生活に對する活ける關係に於て神を現すに在り。夫れ斯の如くにして、神や初めて實現せらるべきなり。

此の結論や、當に純理に於て正當なるのみならず、亦た歴史に於て然るなり。次章に於て即ち之を述べん。

## 第二章 精神的復活の法則

成長發達の法則は、心靈と身體と、個人と國民と、多くは皆相等しきが如しと雖も、道德的又は精神的の發達は、智識的又は肉體的の其れに比して重要なる差異あるなり。

△智識的と道德的との差異 蓋し後者は甚だ漸次的なりとす。固より肉體的及び智識的の發達に於ても、靜止の期と活動の時とは之れ有り、唯だ其の進歩や日々之を識別すると難きなり。然るに道德的又は精神的の變化に至りては、其の來るや一日一瞬間にあるものにして、純然たる革命と言ふべし。但し此等の變化を來す迄の進行が常に緩慢なるは事實なりと雖ども、變化其のもの（内的生命の外面に發露する）は突如として來るなり。而して往々激動を現するなり。

理想は、植物の如く、光の中に生長す。單に思索上の眞理は、智識的の發達を鼓舞

することを得べしと雖ども、生命に何等必要の關係をも保持する無し。然るに道徳的眞理は之に反し、直接に吾人の行路を指示するものなり。予今ま、同一物に就て、平等なる數個の物は相互の間に於ても平等なり、と言ふ事を學びたりとするも、之に依りて予に何等の義務をも生ぜず。然れども予今ま、神は我が父なること、人は我が兄弟なること、を聞けるの時、予は何事をか爲さざる可らざるを思ふ。單純なる思想と區別せる道徳的眞理は、義務の觀念を附隨するの知力より生ずるものと云ふべし。

△個人の慣習と其革命 抑も人は慣習の合成體なり。吾人の動作は、水が溝渠の中を流るゝが如く、慣習の中を走る者なり。慣習の溝渠は動作の瀬流に依りて形成せられ、而して遂には其瀬流をも導くに至る。深き溝渠は長時<sup>なが</sup>く続ける瀬流に依りて鑿たれ、而して其の慣れたる瀬を變更するは増々困難の事となるなり。即ち一度成立したる慣習は自ら存続し行くものにして、唯だ非常なる形勢ある時に於てのみ、其の舊流をして新溝渠に變せしむるを得るなり。

道義上の智識の僅少なる増加は、既成慣習を改むること大槪難し。されど道徳的「光明」にして發現するあらんか、此に吾人の不安は生じ。其の道徳的眞理が吾人に生活の一變更を要求するものなることを明悟する迄は、其不安は去ること無く、此に舊慣習と新光明との間に於て多少の闘争あるを免れず。而して其落着する所は、舊慣習の勝利、品性の惡化となるべきか、將た又た、舊慣習を打破して、新生命に入るべき新光明の迸發遍照となるべきかにあり。此の如き経路は終始繰返さるゝものにして、其の道徳的、精神的發達に於ける變化の時機は、常に多少、洪水汎濫の觀を呈するものなり。

△社會の慣習 蓋し此の事や、個人に就て眞理なるが如く、社會に就ても亦た眞理なりと言ふ可し。即ち其の承繼し來れる慣行は確固たる慣習となるなり。既成の慣行は多くの弊害をも掩蔽し且つ神聖化し、而して弊害は嘗に認許せらるゝのみならず、世は却て之に執念く固着するに至る。新光明の之に會するや、最初は係はる所無きが

如しと雖とも、應て之に對抗するに至る可し。而して光明の増大するに従つて不安も亦た増大し來り、遂に多少革命的の社會改革に至りて止まん。斯の如くにして、世界の道徳的及び精神的進歩は、「改革」若くは「大復興」を以て開幕せる新時期に於て表はさる。

△物質的智識的發達 國民の物質的成長ある時は、必ず之に次ぐに、相應なる智識的及び道徳的發達を以てするものなり。蓋し、富又は權力の増加に伴ふ誘惑の増加は、之に應ずべき智覺と自制とを缺く可からざればなり。之を過去に見るも、異例ある物質的繁榮の時代には、多くは毎に特殊なる智識的及び精神的の活動を以て之に次げり。十九世紀は、夫の驚くべき、殆んど奇蹟の如き、物質的發達を以て其の特性となす。而して智識的進歩も其の顯著なるに於て物質的進歩に劣るものと云ふ可らず。然り、科學の法式は智力に於て吾人を富ましめたり。想ふに、今日の世界の智識の大部分は、百年の星霜を経たるもの稀なる可し。勿論智識の進歩は、其の構成的なると同

時に又破壊的なり。信仰の舊き構造は、新建設の成立以前に於て破壊せらる可し。されば當代の智識的進歩や、先づ夫の「疑問」(疑問は破壊の前提なり)の流行を伴へるは勿論なり。而して其の結果として、夫の未曾有なる物質進歩の時代の自然的遺物たる物質主義をして更に烈しからしむるに努めたり。

かくて問題は生ず、曰く、此の物質的且つ智識的系統に沿へる大進歩は、次ぐに精神的系統に沿へる新進歩を以てすべきや否や。

△精神的復活 新世紀は前進し來れり。熱烈なる精神的新覺醒をなすべき適當なる時期は來れり。最も熱心なる且つ廣大なる運動は、宗敎的生命を獲得し、自覺を惹起すべく、大西洋の兩岸殊に英國に於て試みられき。即ち所々に大會は開かれぬ、されど英國に於ては出席者は單に自ら基督敎徒たることを公言せる者に限られ、米國に於ては改宗者の數、其の豫期せしよりも尠かりき。

夫の十六、十七、十八の各世紀、及び十九世紀の前後兩期に於て起りし如き偉大な



る宗教的覺醒は此の二十世紀中に於ても亦た之れあるべきか。抑も人民及び文明を向上せしめたる此等の大運動は決して偶然には起らざりき。

固より其の之を呼び起すや單純に非ず、手段は終局まで實施せられざる可らず、斯る運動を支配すべき法則には服従せざる可らず。主の道は備へられて、直くせらるるを要す。

此等の運動や、性質に、形式に、及び之を起したる形勢に於て皆な甚だ相違せり。中には宗教的内容と共に政治的内容をも有するものありて其の行程は複雑且つ遼遠なりき。而して之を研究するに、此等宗教的大覺醒が、各々皆な、其の時代の特殊なる要求に適應すべきものにして、而も久しく疎外せられたる精神的真理の宣傳に依りて來りしは事實なり。

予は思ふ、此等の運動の明確なる討査は、以て此より高き新時代を建設するに力あらん。

### ▲十六世紀

『獨乙の改革』として有名なる彼の大覺醒の當時に於ては、個人は全然寺院の支配する所となり居れり。其の義務とする所は寺院保持にあり、其の自由は寺院の大權に犠牲たり、其の救濟事業とは寺院晚餐式中の一事務と化せり。此に於てか新たに一の真理は要求せられぬ。個人をして寺院の奴隸たる境遇より自由ならしめ、神に對して直接に人格的關係を生せしむ可きの真理は要求せられぬ。

ルーラル羅馬に煩悶せるの時、『正道は信仰に依て活くべし』てふ題目は、天啓の如く來りて彼の心中に閃けり。而して彼は、人の救はるゝは、祭典に非ず、聖饗にあらず、事業にあらず、實に靈活なる信仰に依るてふとを發見せり。此の原理や、更らに、推及して耶蘇基督に對する各自の心靈の人格的關係を以て根本理となすに至れり。

從來久しく疎却せられたる此の教訓の權威により、個人の價値を建設し、良心の自由を獲得し、而して其の救ひを以て主觀的——即ち品性の問題——となせり。此の如

く、時代の特殊なる要求は、久しく其の跡を絶したる真理を喚起し、而して大覺醒は、真理が有力に宣傳せられたる時に來るなり。

## ▲十七世紀

次ぎの精神的大運動は、即ち十七世紀に來れり、ピューリタン復興と稱して有名なもの是なり。

封建制度の下に於ける政治上の權力は、其の大部分は貴族の分有する所となり、且つや多數の弱者より漸次に少數なる強者の手中に移されつ、遂に所謂『神の權』に依て全人類に超越せる大權能を所望せる『王』の手中に集權せらるゝに到りぬ。嗚呼、神の導き給ふ教役者にして王權に頼らんとせるは下劣なりしよ。『彼等は宗教の條規の中に、最も危険なる王政の口實を建立せり。彼等の模範たるビショップ、アンドリュスは、ジエームス王を以て神に依りてインスパイアせられし者と宣言したりしぞや。彼等は極惡なる虐殺にまでも服従せよと宣傳したりしぞや』(グリーン氏英國人民の歴史)。

王は、人民の信仰及び其の禮拜の儀式にまで其の命令權を求め、而して夫の羅馬寺院が曾て要求したるの特權(是れ前世紀に於て改革者の反抗せる所)を横領せり。さればルーテルが絶叫せる自由の真理は再び要求せられ、而して再び復活せしめられぬ。

更に新なる要點は神の主宰てふ教訓の上に横はれりき。即ち王は國家の首長なると同時に教會の首長なりしと、人民は其の君主の神聖てふ事を以て威嚇せられしと、是れなり。疑も無く、人民の多くは、神に對する罪惡よりも、君主に對する背反を以て重大事と思料せり。君主の主權は實權なりき、而して其の命令は、多數の人民をして、自己の身體及び土地に關して苦惱せしむるに至れり。さればピューリタン教徒が、神が教會の首長なると、良心のみ獨り神に應答し得るものなると、を絶叫せるの時、『神の主宰』てふ真理の復活は、神をして活ける神とならしめたり。斯の如くにして、隠れたる經典上の真理を忠實に宣傳せるの一事は、毎に時代の特殊なる要求に適應し、國民の宗教的生命を覺醒し、良心を喚起したり。

▲十八世紀

次ぎなる大復活は、夫のウエスレー及びホイッチフィールドを以て其の大模型となせる十八世紀の其れなり。

前段の回復に次で来りし反動は、急速なる道德上の衰微を誘致せり。夫のデョージ二世は宮廷の紊亂を著るしくし、ワルポールは政府の腐敗を曝露し、而して同時に、民間には汚穢と敗徳と蠻風とを横溢し、宗教は全然、其の精神を喪失したり。アイザック、テイロルは當時の教會を呼んで『美しき死骸』となし、ブラックストーンは、『予はロンドンに於てあらゆる有名なる宣教師を訪ふて質問したるに、誰一人、予のモハメッド教徒なるや、將たキリスト教徒なるやを言明する能はざりき』と言へり。當時に於ても宗教は單に外觀と形式とを以て成立するものとせられしなり。基督教の精神的大真理は疎却せられしなり。精神的熱情は底を拂つて欠乏しぬ。宗教の教師は其の『力』に就て些の經驗をも有せざりき。ウエスレー自身の如きも、精神的真理の福

音に深き經驗を得たるは、二十年間を牧師として費やし、二年間をデョーディアの宣教師として勤務せる以後なりき。彼はデョーディアより歸國の途上、航海中に談りて曰く、他人を改心せしむべく亞米利加に行きたる予自身は、却て未だ神に向つて改心せざる者なりきと。

彼の改心は、其の英國に歸りたる後にありき。而して其時より彼は初めて宣傳すべき福音を有したるなり。則ち、彼自身の如く人を改心せしむべき、而して新人物を造るべき一の福音を得たるなり。

此等疎却せられし精神的真理が、毎に時代の宗教的道德的要求に適應したるは明瞭なり。而して彼等が熱心に之を絶叫したるの時、初めて此の世紀の大覺醒は來れり。

▲十九世紀の前半期

十九世紀前半期の大宗教運動に同じなる有名なる教徒中、チャールズ、デー、フインニーは其の最高の模範人物なりき。

『神の主宰』の格言は勝利せり。米國に於ては耶蘇基督を除きて他に教會の首長を有せず。良心は唯だ神に對してのみ責任あり。されど此の『神の主宰』てふ格言は、人生の自由の價値を全然破壊するが如き手段によりて維持せられ、遂には良心と意志とを大いに癱痺するの結果を現じたり。民衆は神の來りて彼等を教化せんことを拱手して待ちぬ。

其の時、フィンニーは、『自由の動作、自由の犯罪、罪惡に負ふ應報』てふ、從來疎却せられし眞理を絶叫して一世を震撼せしめぬ。彼は良心と意志とを主眼となせり、故に決して犯罪者の責任を緩うすると無かりき。彼は其の自叙傳に曰く、『我等は罪人に談るに、新たる心情に向つて尊崇祈禱の手段を用ゐんとを以てするの代りに、彼等自ら新心情たれ、新精神たれ、と言ひ。以て神に對する深刻なる服從義務を印せり』と。

曾てヘブロッウ豫言者が宣傳せし如き此の古き使命も、其の久しく疎却せらるゝや、

全然忘却せられ、フィンニー氏が之を絶叫し初めし時は眞箇に新たなるものなる如く思はれぬ。而して此の時代の特殊なる要求を充すの眞理も亦た此の原則を應用するに因りて明なるを得たり。かくて良心は興起し、民衆は全く恐怖の征服する所となりぬ。或時彼は學校内の説教に際して吾等に談りて曰く、一の凜烈たる尊嚴は聽衆をして平座せしめ、而して後ちには床上に倒れ、又た慈悲を呼んで悲鳴するに至らしめぬ。『予にして假令双手に劍を持ちたりとするも、彼等が自ら絶倒せし程の速度を以て彼等を斬るは不可能の事なり』。殆んど一瞬時にして全聽衆は各自其の膝に持たれて平伏せりと。

斯の如くにして、又た更に、曾て疎却せられし精神的眞理は眠れる民衆の良心を覺醒しぬ。

### ▲十九世紀の後半期

十九世紀の前半期間に行はれたる深大なる革變は文明史上に未曾有の事とす。産業

上の革命は急激に新状態を生起し、人は生存の爲に急忙なるに至れり。蓋し彼等は、自ら造りし新機械の爲に驅逐せらるればなり。蒸汽並びに電氣は即ち其の鞭たり刺馬輪たるなり。かくて生活は彌々困難となりぬ。變革は漸く有神經體内に及び、人は苦痛を感ずると鋭敏なるに至りぬ。慈善運動は増加せり。人々無言の動物を思ふと、其の祖父等が人類自身に對したるよりも深くなれり。是れ夫の基督教國中にて最も文明せる國の裁判所が、油を以て被告人を煮殺すべしてふ宣告をなせし時より、僅かの年代を経たるに過ぎず。然るに今や犬馬を虐待するさへ犯罪となりぬ。

人類感覺の斯の如き變化が、夫のピウリタンの猛烈なる教理に變更を要求せるは當然なりき。而して『エホバの恐怖』てふ一語は、以て人を説服すべき最上の憑據となれり。

ムーデュー氏を先導として宗教の大覺醒が來りし時、一の新題目は聞かれぬ。それは久しく疎外せられし『神の愛』てふ格言なりき。國民が苦痛を感ずるの鋭敏なるは、戰

争(南北戦争)のバプチズマを経て一層甚しくなれり。蓋し此の戦争の爲めには、始んど總ての家庭に死傷者を出しぬ。されば萬人の心ハートに於ては平安を待ち焦れたり。斯の如き時期に於て、斯の如き状態の下には、『神の愛』てふ優しき眞理こそ、頑強なる心情をも融解し得べけれ。故に産業は急激なる突進を爲しつゝあるに係はらず、人は却て佇立せり、而して『神は世界を愛す』てふ事を聞くべく回顧せり。

△各●自●の●使●命● 觀よ、ムーデューはフィンニーの使命を再び負はず、フィンニーはウエスレーの其を再びせず、ウエスレーはビュリクタン教徒の、ビュリクタン教徒はルートル及び宗教改革の、共に其前者の教理を反覆せざりしに非ずや。元より各々皆な基督教理の大本体より分出せし者なりと雖も、而も各自特殊の使命を有せり。即ち、特に各自の時代に適應して、以て當代民衆の前に神を實在ならしむるの使命を有せり。夫の一時代に卓出せし、豫言者や、其の先人の法式を用ゆること無し。假令其の實質

は相同じきも、其の形式と順序とは之を新にしたり。蓋し其の『時』が新たなればなり。ムーディーにして、若し單にフィンニーを摸擬するに止まらんが、彼は當然失敗したりしならん。之と同じく、今人若しムーディーの使命と其の方法に依て、而して彼が得し如き功蹟を擧げんと欲せば、亦た當然失敗すべし。『Eccē Homo』の著者が言へりし如く、此の如き人物は是れ豫言者に非ずして剽竊家なり。眞の豫言者は、自己の時代に於て、自己の時代の特殊なる要求に就て、神を見る者なり。而して亦た他人にも斯の如く神を見せしめむとする者なり。

唯だ夫れ、使命が新なる形態を以て興らんか、之に伴ふて烈しき反對は呼起さる。而も遂に其の眞理と力とが確立せらるゝは、即ち次の時代が其の豫言者の墳墓を建立するの時に於て始めて之あるなり。

以上四百年間に於ける大覺醒の單簡なる觀察を總括せば、此に將來の計畫に對する正常なる基礎を得る能はざるか。又た、現下の特殊なる要求に適應せる經典上の眞理

欠

MISSING

び、其の天國は正義の觀念となり（アモス）、慈悲の觀念となり（ホゼア）宥恕となり（ミカ）信仰及び贖罪となり（イザヤ）神に對する人格的關係なる而も個人的宗教となり（エレミア）又た再生の觀念となれり（エゼキエル）されど此の時に來らんとする神國の豫言的觀念に於て、精神的祝福は物質的幸福に更代せずして却て附加せられたり。かくて此に、宇宙の正理、神の認識、神との結合、及び神の榮光の輝き等を存するなりき。而して此等は、國民間の平和、人口の増加、健康、長生、束縛無き富有等を伴ふものとせられたり。

此の如く、地上に來るべき神の國に就き、豫言者の熟したる觀念は、世界的・一社會の其れなりき。想ふにエホバの救世主の治下に於ける、神法に對する世界的服従は、必ず世界的祝福、精神的及び物質的幸福を齎すべきなり。換言すれば、實現せられたる神の國は、理想的の世界たるべきなり。

豫言時代が既に經過せし時は、其の觀念は精神的方面少なきに至れり。其の觀念が



尙ほ理想的世界にありしは事實なるも、國民の理想は下落せり。而して基督時代の始めに於ては、イスラエルの敵を征服して世界的勢力を建立するを以て、將來の天國の最も重大なる部分となしたりき。

△イエスの宣言 此時に當てイエスは宣言せり、此の理想的世界は即ち神の國なることを。又た『近けり』とは即ち其の實現が始まりたるの謂なることを。彼は充分能く天國の普通の觀念を知れり。而して之を知れる彼は即ち其の披露演説に曰く、『われ律法と預言者を廢る爲に來れりと意ふ勿れ、われ來りて之を廢るに非ず、成就せん爲なり』と。是れ、基督が來れるは、預言者の神國の觀念を實行せん爲なることを言へるなり。彼の理想は聽者の其より遙かに高かりき、而して之れを實現するの手段は聽者の預期せし所と甚だ異なりき。されど彼が宣傳し、又た使徒をして宣傳せしめんとせし神の國は、理想的世界なりき。完全なる世界的社會、即ち社會的理想なりき。

ダビデより基督に至るまで、イスラエル人は、天國を以て雲上に在るもの、如く思

ひしと曾て無かりき。思ふに斯の如き思想は國民的觀念と全然相隔離せるものと言ふべし。吾人は知る、猶太人の天國とは即ち此世の天國なることを。此の點に關するイエスの引例あり。即ち使徒等が稗子の比喩の説明を求めし時、稗子の生じたる『畑は此の世界なり』(馬太十三の三八)と説き、收穫の時に於て此等の稗子は斂めて天國の外に棄てらるべしと言へり(馬太十三の四〇―四一)是れ確然且つ明白に天國の位地を此の世に置けるなり。

されどイエスが『我天國は、この世界の國に非ず』(約翰一八の三六)と説けりとの理由を以て反對する者あり。然れども、『世界』てふ語は新約全書中に於て種々なる觀念を以て使用せらる。ヨハネ書して曰く『此の世を愛する勿れ……人もし此の世を愛せば、父を愛するの愛その衷にある無し』(約翰第一書一五)彼又た書せり、『神はかほどに此の世を愛し給へり』(約翰三の一六)吾人若し前の手束に示されし『世界』を愛せば愛する程、神と相似ざることとなり、若し後の書に示されし『世界』を愛すれば愛する

程、神と相似るに至る。されば後者の觀念に於ては、天國てふ語は地と其の住民とを意味し。前者に於ては、サタンを以て貴族となす所の（約翰一二の三一、馬太一二の二六）惡魔の王國を意味するなり。イエス惡魔の王國たる此の世界に就て説示して曰く「若しわが天國この世の國ならば、我僕は……戰ふ可し」（約翰一八の三八）と。

但し、神國の位置を以て此の地上に確定したりとて、之よりして「天」を排除するに非ず。其の之を包含せるとは、基督が宣言して、「爾曹アブラハム、イサク、ヤコブ、及び凡の預言者は神の國に在て爾曹は外に投出さるゝを見ん時に云々」（路加一三の二八）と謂へるの語に依るも明かなり。

予は此に於て、天國の外延と其の内包との區別を説明するの必要に迫れり。乞ふ之を次章に説かん。

#### 第四章 神 國

（其の外延及び内包）

天國の外延と其の内包との區別に誤謬を存するが故に、此に思想の不確實と混雜とを生ずると多し。蓋し其の最廣義に於ては、天國の外延は、神が全宇宙なるが如く廣しと雖ども、吾等に對しては、實際に於て唯だ天と地とを包含するのみ。而して其の内包に於ては、神の意思に一致結合するに至りし人々のみ天國に包含せらるゝなり。普佛戰爭に於て、普の兵が巴里を占領せるの時、彼等は地理的には佛蘭西帝國に包含せりと雖ども、而も未だ之に附屬したるに非ざりき。是と同じく、神國は外延的には全世界を含むと雖ども、内包的には唯だ神國の法律に服従する者のみ之に包含せらる。斯の如く、是れ第一には人が精神的に生るゝ（約翰三の二三）によりて入るべき精神的天國を意味すと雖ども、而も是と同時に、吾等が曩きに論じたる如く、其の物質形態も亦た深く重要なものなり。吾等茲に思想の世界に就て談らん。思想の世界や、其

の外延に於ては、思想の及ぶべき有ゆる物質的事物を包含す。工業及び技藝の大博覽會に於て、多少思考の證據を表示せざるものは一も發見する能ざるべし。大なる繪畫或は銅像の如きに至つては數年間の研究の費やされたるを見る。然れども麻布又は大理石の如きは到底思想の世界に入り之を相續し得べきに非ざるなり。神の國は法律の國にして、法律の支配が及ぶ限り其の國の版圖たり、故に其の物質世界は其の精神と同じく之に包含せらるゝものと言ふべきも、而も、天國は其の法律に樂しみて服従するの國なれば、從て又た「義と、和と、聖靈に由る歡樂にある」(羅馬書一四の一七)の國なれば、『肉と血とは之を嗣ぐと能はざる』(コリント前書一五の五〇)なり。

是に於てか明かなり、天と地と教會とは其の外延に於ては凡て天國に包含せらるゝと、而も其の内容に於ては天と、無形の(天上の)教會と、有形の(地上の)教會員にして再生せしめられし者と、のみ天國に含まるゝと。如何なる再生の實驗をも有せずして教會に入り來る者多しと雖ども、何人も『上より生るゝ』と無くして神の國に入ると

能はざるなり。然れども、神の國の内容は管に其の組織員のみを以て盡せるに非ず。ブルースが『或る見解よりすれば、神の國は地上總ての現實の上に天の清淨を示す所の理想なり』と言へる如く、是れ實に一の天來の理想たるなり。

△學者の説 多くの著作家は、天國は精神的なると同時に、又た物質的觀念をも有するを認むと雖ども、而も此の兩者の區別を明かにし。物質の重要なことを指示せるもの一人も之あるを見ず、而して一般に天國の物質的形體に就ては全然之れを不問に附するなり。

オルシヨウセン曰く、廣義に於ける神の國は『外方と内方』との兩面を意味す。ヴン、オーステルデー曰く、『天と地とを包含す』。プレシデント、バスコム曰く、『神の宇宙の組織は物質的にして又た精神的なり』。ウスコット曰く、『神の國は、精神的にして且つ歴史的、永久的にして且つ一時的、外方的にして且つ内方的、有形的にして且つ無形的、一の組織にして且つ一の精力なり』而して教授ビーボデー曰く『神の國

はイエスに於ては、將來の國家と現在の國家、天の社會と地の社會との兩意義を有せり」と。

△物質 上述の如き區別に於て、外方なる、有形なる、地上なる要素、即ち、物質的宇宙は、外延的に天國に包含せらる。而して予は特に強く此の事を言ふ、其は是等の要素が最も重要なるが故に非ず、其の甚だ疎却せられたるが故なり。

吾人はイエス及び其の使徒等が、『神の國』てふ語を以て、一の理想的世界を意味したるを見たり。元來理想的世界てふ思想に於ては、精神的要素は甚だ微弱なりしが、イエスの理想に於ては之を最上の要素となせり。而して彼が此の要素に力を注ぎたるの結果、多くの人は皆な肉の事を全く無視し、而して彼の教訓を悉く精神化するに至れり。例へば『捕虜の救助』『負傷者の自由』等の事は、罪惡によりて束縛され傷けられたる人々の精神的解放を意味し、『盲者の眼を開く』は精神的盲者の眼を開くを意味すと云ふ如き是れなり。

物質は精神と同じき關係を神國內にも保持す。精神や、元より重要無比のものなりと雖ども、諸君が果して物質より脱出し得るものとせんか、其の時、諸君に残れる總てのものは靈魂のみとなり、此の世に對して何の爲すべきもの存せざるに至るべし。

イエスや、決して此の如き誤謬に陥らざりき。彼は知れり、物質的害惡を革むると無くして、到底理想世界の存する能はざるとを。蓋し彼は常に盲者、跛者、病者、餓者の爲に憂へたればなり。即ち彼がガラヤを徧く廻りて天國の福音を宣傳へる時、『民の中なる諸の病、もろくの疾を醫し』たると吾人の聞く所なり。(馬太四の二、三) 又た彼が弟子等に命じて天國の福音を傳へしめんとして曰く『病の者を醫し、癩病を潔くし、死たる者を甦らせ、鬼を逐出すとせよ』と(馬太十の八) パブテスマのヨハネ、イエスが果して神の救世主なるかを疑ひ、使者を遣はして之を問ひし時、イエス曰く『爾曹が聞くところ、見るところの事をヨハネに往て告げよ』と(馬太十一の四) 蓋し此に天國來るの有形なる證據ありたるなり。即ち曰く『醫者はみ、跛者はあゆみ、

癩病人は潔まり、醜者はき、死たる者は復活され、貧者は福音を聞かせらる」と(馬太十一の五) イエスは民衆に對して深き同情を有せり、嘗に彼等が「牧者なき羊の如かりし時のみならず、彼等が『食ふべき物を有せざりし』時に於て亦然りき(馬太一五の三二) イエス死より甦へり、ガリラヤの海にて弟子等を見たる時、彼は羔を愛すると、羊を救ふなどを談れり。然れども、其の最初の語は、實に『小子どもよ、食物あるや』(約翰二一の五)にてありき。註釋家或は曰はん、是れ精神的の食物を意味すと。然れども彼が、餓えたる漁夫等の爲に實物の朝飯を備へたるは事實なるを如何せん。

△天と地 イエスは常に精神に就き、品性の改革に就きて説教せり。是れ決して天を得るに必要なるが故に非ず、世界を得る爲に必要なるが故なりき。而して彼の眼は空を望まずして必ず地を視たりき。人は柔和ならざる可らず、然れども其は柔和なる者が天に入るが故に非ずして、『地を嗣ぐことを得べければなり』(馬太五の五)彼の

弟子等は「光」となりき、されど其は天に達するの光に非ずして世を照し得るの光りなりき(馬太五の一四) 彼等は又た「鹽」となりき、されど其は地を避けて救はれたる所に一の場所を發見すべき手段に非ずして、地其ものを鹽にして且つ救ふの鹽なりき(馬太五の一三)

イエスは天の實在を教へたり、されど彼の教訓に於て、天は其の僅小なる部分を占めたるのみ。彼の教訓は主として此の世、及び此の世に於ける生活に關係せるものなりき。彼は明かに信じたり、人をして天に適はしむる最良の道は、天を地上に降し來り、人をして正しく之に慣れしむるに在りと。

吾等「爾國を臨らせ給へ」と祈るの時、直ちに之に附加して「爾旨の天に成ごとく地にも成せ給へ」(馬太六の十)と唱ふべし。思ふに此の後に附加したる祈禱は、前者に對する基督の説明なり。少しく後の節に於て又た同じ説明は加へられたり、曰く「我を召て主よ主よと曰もの盡く天國に入に非ず、唯これに入者は我天に在す父の旨に遵



吾等の其に比して如何に無意味なりしぞ。筆者は太陽が熱と光とを與ふるものなることを知り、而して是れ彼が知れる總てなりき。筆者は其の引力を知らざりき、其の壯大なる系統の中心なることを想像せざりき。彼は又た知らざりき、其の空中に雲を起し、朝光夕榮を以て之を彩色することを。然り、科學は吾等の爲に此の聖書の比喻に多大の意味を添へたりき。而も吾等は、詩篇筆者が之を知らざりしとの理由を以て、此の多大の意味を棄つるを得るか。

△自然法と樂園 主イエスが其の弟子等に分ちし責任は『全世界を廻りて凡ての人に福音を宣傳ふ』るにありき(馬可十六の十五)當時に於て『全世界』とは亞細亞の西邊、亞弗利加の北邊、及び、歐羅巴の南邊を指したるなり。此等の境界は其の責任を受けたる弟子等の義務の量を示したりき。(されど此を以て直ちに吾等の義務をも量るべきか)されば又た、其の志す全地方に向つて、『爾旨を……成せ給へ』の祈禱をも加へられたるなり。是に於てか吾人は思ふ、物質、精神、何れの世界に於ても、自然法

則は總て是れ神の意思の表章なることを。而して『爾旨の天に成る如く、地にも成せ給へ』てふ語は、吾人が完全なる『人』と成るべき、身体、智識、心情等の法則に完全に服従すべきの意味なることを。即ち、其身体は、之を夫の手を以て造られしよりも一層美しき神の宮殿たらしむべし。其の智能は、之を眞理に對して透明となし、ダイヤモンドの如く光明の宿體たらしむべし。而して其の心情は、之を純潔にして復た汚す可らざる自覺の中に常に神の面影を反映するに至らしむ可し。是れ社會的有機組織の總ての法則に完全に服従することを意味するなり。而して社會を完全にする所以なり。而して全人類の關係と規律とを神聖にする所以なり。然り、正義を生命とし、愛を法則とするの文明を、完全にし神聖にする所以なり。抑も此等の語や、遵守したる自然の法律を逆説せるに過ぎず。故に、自然にして成就せられんか、何の疾苦あらんや、何の欠乏あらんや。否な實に、イスラエルの古豫言者が告示せられし豊富、健康、平和の樂園は開かるゝなり。

ハーバート、ステッドは、アラマイック語(イエスが語りし語)に於ても、ギリキ語(新約書の語)に於ても、『The Kingdom of God』(神の國)とは「神の仁政」の意なりしを指示したり。而して又た此の仁政に就て記して曰く、『來らんと欲する者を悉く包容する所の基督の友愛よ、真正なる一切の共有を含むの共有よ、家、國、社會組織、科學文學技術の結合、等を包容し支配するの共有よ、聖なる社會よ、常に人間の真中に樹立せる、常に人生を掩ふて光輝の迸射する完成の日、即ち神國が、地上に實現せられ、天上に充實せらるゝの日、に至るまで、無限に其の光明の輝き行く聖なる社會よ。嗚呼愛の帶は、人類全体を一團として之を捲き緊めんとすなり。而して天地の父の御位と衷心こころとに、總てを結び着けんとすなり。人種や、人色や、文化や、是に於て何かあらんや。』

『斯の如き社會の到來とは、豈に光輝ある音信に非ずや。真に樂しき好音信に非ずや。有ゆる社會完成の夢想中、斯の如く高大なるものは他に發見する能はざる可し。』

況んや、是れ決して單純なる夢想に非ず、實に生々擴充の行程に於ける一事實なり。嗚呼總ての歡樂中の最歡樂は萬人の爲に開放せらるゝよ。』



## 第五章 神 國

(此の教理の結果)

吾人は茲に、真正なる神國の教訓に、當然、附隨すべき推理と結果とを考究せんと欲す。

(第一)天國は精神と物質との構成体にして、此の二者の相互の關係は、多くの舊式なる爭論を醸成す。

眞理は一の圓球なり、故に二人の者互に反對の半面を見るときも、圓き眞理は一なり。唯だ、人は一度に半球面を見得るに過ぎず、而して多くの爭論が停止するとなきは互に半面の眞理を争へばなり。或者は唯だ理想を見、他者は現實を。或者は内方に注意を定め、他者は外方に。或者は心靈を救はんとし、他者は身体の爲に努力す。或者は曰く、人の内的生活を改めよ、然らば其周圍を改むるに至らん。他者は曰く、境遇を改革せよ、然らば汝は品性を改むるに至らんと。而して彼等が斯の如く互に他を非難

攻撃するの間は、世は何時までも苦悶し且つ懊惱せざる可らず。

此の終局無き論争や、兩者共に正にして、而も兩者共に邪なり。各自が可となす半面の眞理に對して正しく、各自が否となす半面の眞理に對して邪なり。何ぞ兩半球を合して全圓となざらんや。而して世界をして之を廻轉せしめざるや。是れ實に眞正なる天國の教理が爲すべきの事に屬す。此の教理や、精神と物質と、理想と實際と、内方と外方と、心靈と身体とをして、無關係のものとして相對立せしむるものに非ず、況んや又反對のものとなすをや。然り此等の物は一全体の部分にして相互に驚くべき關係あり、深き感應あるものとせらるゝなり。

教會の最大なる誤謬は物質を無視するに在り。排他的に精神上にのみ努力するは、恰も小兒の心靈を救はんとする母が、其の衣食や衛生を疎却するに似たる哉。結果は遂に救ふべき心靈の大部を消失するに至るなり。

所謂『基督教的科學』の急速なる發達は、夫の心身の關係を認めずして物体を無視し

たるの基督教に對する反動なり。又夫のユニテリアン主義と同じく、我エホバの仁愛を實際に無視するの保守主義に對する反動なり。而して反動が其の一方に偏極するは亦自然の勢と云ふべし。故に、此等に對する補欠は實に周到せる眞理を宣傳するにあり。

此の世に來らんとする天國の爲に活動するに際し、吾等は其の思想、其の計畫、其の順序に於て物質と精神とを同位地に居らしめざる可らず。是れ神の思想、計畫、順序に於て然りし所なり。願はくは吾等をして物質が有する價值を精確に認めしめよ。其の價格を超計するも底算するも共に誤謬に屬す。物質を最上に置くは『汚物哲學』に容れらる可し、而して物質主義の泥中に沈む可し。而も又物質を無視するは恰も土臺なくして家屋を建築せんとするに等し。

吾等は未だ物質的境遇が如何に廣大に道德的進歩を支配するかを精かにせず。若し其の境過の効力を精査せんと欲せば、吾等は其の原因を求めざる可らず。然り、科學

は、物質上の原因より萌發する多くの精神界の現象を示す。收獲の『時』は空氣と日光との内に景色ばむと雖ども、而も其の根は下に地中にあるなり。

予の一友人にしてエビスコーパル監督の職にありし者、數年前、長屋の狀況に就て研究せしことあり。彼は猛夏に際して、ニューヨーク市の最惡の長屋たるヘルス、キツチンに寄寓せり。然るに最初の夜は甚しき頭痛の爲に夢を破り、次の朝は咽喉の劇痛を覺ゆるに至れり。彼は其の重病となるべきを恐れて、地方に行きしが、數日間の新鮮なる空氣は、彼をして通常態に回復せしめたり。是に於て復た、前の經驗を再びせんが爲に長屋に歸りぬ。かくて其の夏中、同じき結果を繰返しながら市街と田舎との間を往來すると六回を重ね、而して其の頭痛と咽喉痛とが其長屋の惡空氣に原因するとを發見したり。此間に於ける彼の觀察は最も趣味ありき。即ち彼がヘルス、キツチンに於て目覺めし時は毎に其の全身の神經が一の興奮劑に向つて叫びつゝあるを發見し、而して酒樓に走りてウヰスキーの一グラスを命すると無きを得るには、彼は全

力を注いで自ら制せざるを得ざりき。

道徳的説諭も悪空氣の中に於ては無能なり。

次の事實は、専ら犯罪人の研究と、犯罪人教育に従事せる、故チャールレス、ダッドレ  
ー、ワトナー氏より聞き得たる所なり。エルミラ懲治監に於て、數年前、某の主任醫  
が監中の最悪なる囚人をして轉心せしめんとを試みたり。先づ最も残酷なる十一人は  
選ばれぬ。彼等は皆青年にして、勞働も勉強もせず、何等の忠告をも拒絶するなりき。  
此に於て其の醫士は最初に土其古式の入浴をなさしめ、次で最も注意して彼等の食物  
を研究し、同時に又秩序的に身体訓練を施したり。斯の如くすること數週間にして、  
十一名の内九名は、自ら智識の進歩を目的とする組に編入せられんとを請ひ出でぬ。  
高き天性は底きより上達すと云ふべし。

近世の科學は人の物質的、智識的、道徳的要素が相互に密接なる關係を有すること  
を證明せり。是れ其要素の一のみを高上せしめんと計りて、他の要素を敗類の儘に放

棄するの不可能なる所以なり。

されど、又、社會が精神上に冷淡なるは、教會が物質上に冷淡なるよりも甚だ厭ふ可  
し。若し勞働者にして宗教の必要を覺らざらんか、彼等は平民を興起せしむべき最長  
の鐵杆を疎却するものなり。

基督の使徒等は、近世の多くの基督教徒と同一なる考へを有せしか。近世基督教徒  
は曰く「吾人は知る、夫の十字架と其の苦難や、猶太人に對しては、怖ろしき刑罰に  
して、異教徒に對しては、痴愚なる事實たるべきことを。されば吾等は、何れに對し  
ても言を用ゐざらん。吾等は總ての人の前にクリスチアンの生活に活きんと欲す。吾  
等はクリスチアンの精神を顯はさんと欲す。吾等は總ての道途に於て、爲し得る限り  
善の總てを爲さんと欲す。されど吾等は、クリストと其の十字架とを宣傳せんことを  
欲せず、恐らくは吾等は、吾等が得んと欲する夫の尊貴なる主と雖るゝに至ればな  
り」斯の如き盜人的基督教は決して基督教文明を生産すること能はざるなり。若し人

類をして興起せしめんことを企圖するの人が、天國の眞の觀念を所得したらんには、決して精神、物質の何れをも疎却せざるべし。而して更に、物質は精神を他に傳達して感化を及ぼすの手段たることを發見すべし。故に、神の國を正當に解せば、物質主義的傾向の阻止に努むるに至るべきなり。

(第二)、眞正なる天國の教理は、神と自然法則との關係を闡明す。

此の世界が尙ほ若かりし時は、無論自然法は人の知らざる所なりき。總ての自然は神の生命の發動せしものにして、其の運動は即ち神の活動となせり。イスラエル人は自然界の併列を以て總て神の意志に歸せり。

舊約聖書は此の觀念を以て充さるゝものにして、而も此の觀念や、新約聖書に於ても亦誤らざる所なり、神は其の日を照し(馬太五の四五)其の雨を降し(馬太五の四五)天空の鳥を養ひ(馬太六の廿六)其草を裝はす(馬太六の卅)是れ實に小兒の單純なる信仰によりて顯はされたる最初の階程なり。

次は、自然法則の發見し初めらる時なり。法則の抽象せられし所に於ては最早人格的意志は認められず、唯非常に稀に神の意志に交渉するものあるのみ。遂に法則の主宰が宇宙なることを發見するに及んで、多くは其の宇宙より神を排除するに至るなり。第三期は即ち吾等の進入しつゝある所にして、人は、自然法則が神の意思に代るものに非ずして寧ろ其の表章なることを心付き初めたり。法則無きの意志と意志なきの法則とは、等しく眞理にして等しく誤謬なり。各々半面の眞理を包含するものにして、兩者の合致せる所に初めて『法則を貫くの意志』てふ全圓は創造せらるべし。

要するに、第一期に於ては、未熟なる信仰に依頼し、第二期に於ては、無智識の信仰に對して無信仰が勝利を占め、第三期に於ては、無信仰に對して智識的信仰が勝利せり。

吾人の信仰は、全能なる魔術者、又は、偉能ある妖怪に對する信仰に非ず。吾等は、神が自然の進路を破壊し、或は、自然の外に超在するものなることを信する能はず。

神は、自然の中に内在し、人類の希望、嚮導、支配、成達等に於て其の原動力たり。自然法則は神に對抗するものにあらずして、寧ろ神の器具なり。

天國の誤謬觀念は常に世界の誤謬觀念を包含す。天國の物質形態を誤解する者は曰く、『自然』にして神の王國に屬せずんば、即ち此世界の一部分に過ぎずして神に背反するものなりと。自然は神と吾等との中間に來り、而して吾等より神を蔽ひ隠すが如く見ゆ。されど、吾人、若し、天國は精神と同じく物質をも包含すること、及び、兩者は相互に密接なる關係を有すること、を知らば、『彼』は何れをも等しく支配し、『彼の法律』は兩者何れをも包むものなることを知るべし。又『彼』は宇宙の一部片の神に非ずして全宇宙の神なることを知らん。

斯の如くにして、自然は彼の『絶対無限者』を蔽ひ、而も之れを表示するの布と成るなり。吾人は見る、彼女(自然を言ふ)の表象は『彼』の方式なることを、彼女の調和は『彼』の道理なることを、彼女の美は『彼』の想なることを、彼女の奇異は『彼』の智慧なることを、彼女の力は『彼』の能なることを、而して彼女の法則は『彼』の意志なることを。

此の觀念は歴史上に於て『神』を認む。是れ日常生活に於ける總ての出來事の中に、神の攝理の室房を作るものなり。是れ祈禱に對して理論的基礎を呈し、且つ吾人の信仰を強固にするものなり。

科學は、自然法則を發見し、吾人をして、神と共に其法則を適用して以て、天國を建立すべき有力なる勞働者とならしめ、且つ此の幸福なる自覺を鼓舞するに適當ならしむ。

(第三)、眞正なる天國の教理は、又所謂俗事をして神聖ならしむ。

神聖と世俗との間に、彼の舊式なる、誤謬なる、而して悲しむべき區別を立つるは、是れ次の如き想像の上に基礎を置けるなり。即ち、人生を透して、神、永生、靈魂、宗教に關する方面と、世俗、現世、身体、現代に關する方面、と、の間に一の分割線

を存すてふ想像是なり。前者は神聖にして後者は俗事、兩者の間には當然撞着を存すとなすもの是なり。かくて、來世と現世との間、靈魂と身体との間、宗教的事物と現的事物との間に於て利害の衝突あり、而して神と世界との間に敵意ありとするに至る也。

此かる、神、人生、宗教、の誤謬觀念は、唯天國の極惡なる觀念と結び付き得るのみ。吾人若し、イエスの出現し、活動し、死せしは、神の意の完全に地上に爲され得る所以なるを見れば、天國とは即ち理想的世界なることを知るに足らん也。吾人若し、現世が來世の如く完全ならしめうるべきこと、靈魂と肉體とが相據るものなること、精神と物質とが共に等しく天國に屬すること、現世が宗教的なるべく、又ならざるべからざること、吾人の飲み食ひ其他一切の行爲が神の榮光として爲さるべきものなることを見るの時、吾人は所謂俗事てふものの在所を失ひ。而して神の榮光たり、天國の建設たる能はざる事業は、不神聖にして且禁止し得べきものなることを知る。

(第四)、次に神國の眞正なる教義は教會の眞使命を明確ならしむ。

教會はキリストを首腦とする所の團體なり。其團體及び團體員は首腦の用器にして、首腦の目的を充さんが爲めに存す。教會はキリストが開始せる事業を遂行せん爲に組織せられたるもの也。若し教會の此世に於ける目的にして基督の其れに相反せんか、教會は其の主に對して不忠と言ふ可し。基督の奮闘の大目的にして神國にあらば、教會も亦然らざるべからず。神國の誤謬觀念は教會の誤謬觀念を來し、神國の狹隘なる觀念は亦教會の使命に狹隘觀念を生ず。

神國が若し天と同一ならんか、教會の使命は個人の心靈をして安全に地より天上に到達せしむるに在らん、又若し神國が教會其ものと同等なりとせば、教會は只管自己の建設に努むべきなり。

然れども一般の解釋にして、神國と教會とが同一ならずと言ふにあらば、後者は前者の手段に過ぎずと云ふにあらば、而して神國とは此世の理想化せられたるものにし

て、キリストの理想が實行せらるゝ時に於て實現せらるゝものと爲さば、教會の目的と制度とは從て亦一變するを要す。然り、教會は「靈」よりは寧ろ「人」を救はざるべからず、個人に對すると同じく社會に對しても其使命を負はざるべからず。かくて教會は泥溝より寶玉を拾ひ取らんよりは寧ろ「泥溝」其ものを淘清するの甚だ賢なるを見るべし。蓋し其失はれたる寶玉の僅少なる部分を發見せんが爲に全力を盡して尙ほ足らざるよりは、寧ろ玉を失ふの患なからしむるの勝れるに如かざれば也。

教會の使命の狹隘なる觀念は、宗教と道德、基督教と慈善との間を隔離するに至れり。吾人が同胞に對して邪曲ならんか、神に對して亦真正なる能はず。非道德的なる宗教は非宗教なり。非宗教的なる道德は非道德なり。慈善的ならざる基督教は、基督教的ならざる慈善と同じく不健全なり。神の王國は宗教と道德、基督教と慈善とを以て構成す。

教會の使命が教會自身を擴大するに在りとなすの誤謬は、多くは教會と神國とを同

一視するに基く。されど教會は多くして天國は一なり、若し彼等が神の王國を建設せんことを熱望せば、彼等は宜しく同盟すべき也。全體すべき也。吾人若し、教會員たるよりは寧ろ神國の人民たるに熱心ならんか、基督教徒の合同は大發展を來すべし。是に關してフイリップ、シアッフ氏は曰く、『十六世紀の改革は分離に終りたり、二十世紀の改革は再合同に終るべし』と、されど此の新改革は、教會が神國の眞教義を體得する迄は到底開始せらるべきものに非ず。

(第五)、更に、天國の眞教義は、希望ある大鼓吹を與ふるもの也。

吾人の最高極點は、人生が精神的支配の下に在り得べしとの天啓に過ぎず。而して吾人は彼の『最高者』と高き同輩たるの自覺に達する也。吾人若し、吾人自身のみを最高點に保持し得べしとせば、須らく彼の『變容し給ひし山上』に於て主と同居することを要す。されど吾人は其山より降らざるべからず、而して多くの悪魔と争闘しつゝある社會を發見せざる可らず。此悪魔や實に利慾、罪惡、無智、不正、壓制より生ずる

なり。然り而して、如何に多くの雄健なる心情が此の罪惡の前に元氣を阻喪せしかよ。如何に多く神の觀念と、其の力と愛との觀念をして、遠離し曖昧ならしめしよ。吾人は常住のインスピレーションを要す、而して剛強にして堅忍なるを要す、而して純潔無垢の青年の如く、常に燃ゆる信仰と熱誠との神聖なる焔火を保持するを要す。然り、而して斯の如きインスピレーションは、實に此の神國の眞教義より來る也。

吾人の思想、吾人の願望、吾人の目的にして一小範圍に限られんか、人生の歸趣は以て狹隘なるに至るべし。若し然らずして、神の王國が日常努力の第一目的とならんか、全世界は實に其の範圍に歸するなり。而して吾人の思想、吾人の慾求、吾人の希望、吾人の努力は、總ての人種、總ての國民、總ての後世を包容するに至るべし。神の動き給ふ計畫は吾等に默示せらる。吾等は自然の経路、歴史の行程、に於ける意義と目的とを了解す。斯くて吾人は、總て文明の進歩の助手たるに至るべし。人類に關はる事は皆吾人に關はる。總ての物は吾人の有なり。蓋し吾人は神國の承繼者なれば

なり。『何も有ざるに似たれども凡ての物を有て』るものなればなり（可林多後書七章十節）有機的社會たる神國は全一のものなれば、其の各部分は他の各部分の爲に努役す。斯くて地球の反面に於ける文明の運動は、大も、小も、スエズ運河も、農夫の勞働も、皆吾人に影響し、吾人に關係す。蓋し天國の人民として、吾人は其の全體の内部に於て相當の權利を有すれば也。

天地の全能を附與せられたる『基督』の聖なる指導の下に、社會無數の力は大成就の爲に動きつゝあり。政府の私慾的計畫、政治家の奸策、競争的合圖の企圖は、總て皆神國の爲に壓服せられつゝある也。多數人は無意識に之を助け、有力なる瀛鐘は之が爲に鑑ひ、織機は之が爲に織り、水車は之が爲に轉る。是れ總ての活動の起點なり、總ての進歩の標的なり。

宇宙の大法は諸君の背後にあり。細礫も、砂粒も、太陽、小星と相感應す。之と同じく、尋常狭小なる事件も、人生に對して廣大尊貴なる關係を有す。而して日常の平



事も新意義と新動機とを以て輝やき、世界の中に活動する神の設計の一部として見らるゝに至る。

神國の眞教義は、光輝ある理想と其實現の確信とを與ふるものなり。此の教義や、惡の『必然的』若くは『恒久的』存在を斷じて許さず。神の王國は、合理的なる、而して實現せらるべき運命を有する、幸福郷なり。是れ實に、天涯の神より來り、而して神の威光に輝く所の、新エルサレムなり。斯くの如く完成の見込み確然たるは、無限の忍耐と勇氣とを鼓吹す。見よ、彼のアフリカ異教徒の爲にクルマンの岸邊に於て、ロバートとマリー、マファットのとは、一人の教化を見ずして而も十年の間、孜々として勞役せしに非ずや。文明國の境界を去ること四百哩、野蠻人の中央に入りて、彼等の信仰は曾て戰慄だもせざりき。而して此所に未だ一點の微光をも見ざるの時に當り、或日一書は遠き英國なる友人より來りぬ、要用の物を何なりと送るべしとの意なりき、其時、マリー、マファットの答書に曰く、希くは吾等に聖餐書を送れ、吾等は必ず、そ

を要するの日あり」と、其の到來せしは三年の後にして、實に第一の教化者が受洗せし前日なりき。

天國降臨の爲に勞役する此等の人の信仰は、神の、愛と力と智慧とが滅びざる限りは、斷じて之を貶ぐることはざる也。

天國の眞教義は實に最も高貴なる同胞心を吾人に鼓吹す。

夫れ、吾人の目的が神國の建立にあり、吾人の動機が愛にあらんか、其の目的と動機とは、吾人をして古代の豫言者と、各時代の大精神と、イエスキリストと、父其自身と、同等ならしめ、而して吾人は其の友となり、共同労働者となる也。吾人は彼等と深き友誼を有す、同じ目的——理想的世界——に於て、同じ動機——無我の愛——に於て、同じ精神——歡喜の勤勞と樂しき犠牲——に於て、同じき大希望——罪惡なき悲慘なき世界——に於て、且つ又同じ快樂——天國格臨の祝福——に於て。

## 第六章 耶蘇の社會法

天國の實現はイエスの社會訓の實顯に伴はる。

△**社會訓の實顯** 十四五年前にニューヨークに僧侶の會合ありしが、彼等は社會問題に對して殊に感興を有したりき。而して又彼等は基督教徒の思想と活動とを再整せんとするの首領等なりき。その會には凡十二人の出席者あり、その中には國民間及國際間の聲望と勢力とを有する人々もありき。彼等の中の一領袖は、イエスの教訓中に何等の社會法を發見し能はざりしことを悔い且當惑せることを述べたりき。而して猶一層驚かざるを得ざることあり、そは基督教界の領袖連が全く基督教の社會思想を忘却し居りしを以て、此の一言が何等の批難もなくして承認せられたりしこと是れ也。爾來イエスの社會教訓に關して、批難すべき缺陷多き書籍は續々として刊行せらるゝに至りぬ。

見よ、文化が個人的なりし當時にありては、世人は争ふて新約全書の中に個人問題に對する解決の光を得んと欲し、而して彼等の索むる所のものを發見したりき。然るに産業の發達は個人的立脚地を奪て集合的即ち社會的となせり、文化も亦た之れに適應して變化せざる可らざりき。この社會的革命に應じて社會的要求の自覺及び社會問題は承認せられぬ。而して世人が此の社會問題の解決を得んがために聖書に赴くや、新見解は『神の言』より發顯せられたり。

△**根本的三原則** 社會有機體は組織的原則を包含し、天國は亦た法理を包含す。イエスは三個の根本的社會原則を立て、天國の根本的法理として之を宣傳したりき。然らばその三原則とは何ぞや、曰く勤勞、曰く犠牲、曰く愛。

### (一) 勤勞の法則

勤勞の法則たるや、其の一端を以てするも精神界と自然界とを包有するばかりに廣大なるものなり。自然物が此法則に従ふは無意識にして、且つ道義に關せざるや論な

き也。蓋し是れ自覺ある人の高尚なる自意的勤勞の初歩となす。人類の觸接する所、必ずや其處に或種の勤勞あり。試に見よ、昔時羅馬の文化は、奴隸の絶對強迫的勤勞を以て之が基礎を爲せるにあらずや。又見よ現時に於ける産業的文化の基礎は、雇傭労働者の報償的勤勞によりて成れるにあらずや。

自然界及び人類社會に於て例證せられたる此の勤勞の原則、イエスは之れを高めて基督教化したり。而して彼が打ち立てたる社會の根本的法理の一とならしめたり。イエスは他の事項に就て弟子等に要求したる如く、勤勞に於ても自ら最高の模範を示したりき。假令彼は、神と同等たらんとするは爭奪に非ずと思惟せずと雖ども、而も彼は自ら名聲を求めずして、下僕の模範を採用したり。彼は其の弟子等に謂つて曰く、『我は爾曹の中に事ふる者の如し』と、(路可二二ノ二七)又曰く、『人の子の來るも人を役ふ爲には非ず、反て人に役はれんが爲なり』(馬太廿ノ二八)『弟子は師より優らず、僕は主より優らざる也』(馬太十ノ廿四)『子が父の子を遣はせる如く、子も汝等を遣はすな

り』と。彼は畢竟他人に役はれんがために送られたるものにして、彼も亦その弟子を他人に役はれしめんがために遣はしたりき。而して彼は凡ての民族に適用せらるべき最後の審判の原則は勤勞の其れにあるべきことを教へぬ。

イエスは勤勞を目して不愉快なる要事(凡ての人が一様に忍受せざるべからざる要事)とはせざりき、又彼は報償を得んがために爲せよとは教へざりき。否その勤勞たるや一の特權なりと考ふべきもの也き。彼は勤勞が不名譽の稱號として世人に認めらるゝを發見したるを以て、却て之を名譽の稱號となしたりき。故に彼は説きぬ『爾曹のうち首たらんと欲ふ者は爾曹の僕となるべし』(馬太二〇ノ廿七)。イエスの定めたりし天國に於ては、他の凡ての人々の上に立つべき者は、最も多く識る人、最も多く祈る人、最も大なる歡喜を享受する人にあらず、又た最も多く他人を役する人にもあらず、寧ろ最も多く他人のために役せらるゝ者即ち是れなりき。この差別は勤勞の法理を以て附從的のものとなさずして、却て天國に於ける根本的のものとなすなり。

△商業上の勤勞 かの商業上の勤勞と基督教の勤勞との間の區別を明にするは重要事なり。各文明社會に於て千種萬態の勞役あり、總て金錢の通用に依りて行はるゝ交換は即ち之れあり。商業の根本的法理は需要と供給との關係なり。貨物はその價の最も多き時を見て賣り出さると雖も、若し貨物にして需要無らんか、商業上の價格はあらざるなり。商業上の他の根本的法則は價格に對する價格、即ち交換の法則これなり。市場は生活の必需品を以て満たされ、而して人はその必需品の不足のために死滅するに至るやも未だ知るべからず。さはれ人々の要求が如何に大なりと雖、若し其交換に於て自ら供すべき何物をも有せざれば、事業は全然停止するなり。斯の如き商業界の二法則に於て注意を牽く所は、勤勞の動機よりは、寧ろ勤勞其もの及び其の報償にあり。動機と需要とは、勞役の性質又は其の要求を形成するの外、何等の結果なし。其の主要的物件は要求せられたる行爲又は貨物なり。

反之イエスは行爲よりは寧ろ行爲の動機に注意を専集したりき。彼は天國に於ては、服従と不服従の性質は、その精神、動機及び目的に依て識別せらるべきものなることを教示せんかために、『山上の垂訓』の大部分を述べたりき。

△勤勞の目的 商業上の勤勞は需要を満たすを目的とし、基督教の勤勞は欠乏に適はんがためなり。故に前者は利己となり後者は之に反す。商業上勤勞の普通の目的は「所得」にあり、基督教に於ては「有用」なるにあり、而してその自然的報酬は、勤勞せりとの満足と共に、猶ほ勤勞すべき大機會と大能力とを得るにあるなり。

人が唯賃銀或は給料を目的として行動せる時に、その賃銀又は給料を失はんか、彼等は何物をも残すとなきなり。されど若し彼が勤勞其ものを唯一の目的として行動し、而してその賃銀を得る能はざりしとせんに、その損失や彼に取りて如何に重要事なりと雖、そは畢竟唯偶然の不幸のみ、彼の眞の目的は成就せられ、而してその成就たるや彼の眞の報酬に外ならざる也。是と同様に若し人が勢力又は名聲のために行動し、而して彼の勤勞が世の承認を受くる能はざれば、彼は敗亡と冷遇との苦惱を蒙る

に了らん。併し彼の目的にして唯勤勞にありとせば、設令他人が彼の成功の月桂冠を横奪し、而して彼は冷過默殺の外に得る所なしと雖、彼はその成功に對して自らを慶賀祝福し得べき也。斯の如き場合に於ては他人はその脱殻を得、彼はその心髓を得る。而して彼等の報酬は外面的のものにして、而かも何日亡失せんも計り難きに反し、彼のは内面的にして且悠久に贏ち得る也。

勿論予は勞役のために報償を受くるを以て非基督教なりとは言はず、唯その報償たるや超越せる動機ならざるべからずと言ふなり。天國のために働くか或は唯報償のために働くかは、人をして基督教精神と商業精神との間に劃然たる區別をなさしむるものなり。基督教精神にては、受くると雖、そは與んが爲めなり、之に反して商業精神は與ふと雖、そは受けんが爲めに外ならざる也。使徒ペテロは書していへり、『神の各様の恵を司どる善き家宰の如く、各人その受けし所の賜を以て互に施すべし』と。勤勞の精神は各人をして善き賜ものを承認せしむ、我れ等の實體、我等の時、我等の力、

我等の機會、此等は凡て勞役の爲に我等に委せられしなり。然り、人生其ものが神聖なる信托に外ならず。人類の將來は各時代が此の信托を充足する方法如何に繋れり。キリストの使徒たるもの、全生涯は、『主』の如く天國の勞役のため、又地上に早く天國の來らんがために費さるべき也。かゝる勞役は自己否認を包含す、故に天國の第二の大法は即ち犠牲の法則これ也。

(二) 犠牲の法則

此法則は充全にして全人類を包容す。イエス曰く、『若し我に従はんと欲ふ者は己に克ちて日日その十字架を負ふて我に従へ』(路加九ノ二三)。抑も己れ自らを「否認」するは人の一事に過ぎざるも、「自己」を否認するは甚はだ異事といふ可し。難事と言ふ可し。世に或程度の自己否認即ち克己なくして何等の事物にも成功し能ふものなし。競技場の撰手は自己のために幾多の事物を棄て、唯肉體の發育のために智識的精神的の發達を犠牲に供して願みざるなり。されどこは基督教の自己犠牲にはあらず。即ち

基督教徒としての富を得んがためにする貴き願望の大苦患にあらず、又自然的性癖の犠牲にもあらざるなり。又た人は知識或は藝術のために、自己の感情を満足すべき精神と肉體を共に犠牲に供し得べし。彼れは守錢奴の如くさばかり卑心を有するものにあらず、又懸賞競技者の如く劣情を持するものにもあらず、然れども彼の克己たるや守錢奴、懸賞競技者よりも基督教徒に近しといふを得ず。何れにしても人間の或一部は他の部分のために否認することあり。彼は自己を否認するにあらずして、彼の一部分を否認するなり。キリストの語れるは自己否認なり。キリストの要求せるは自己意志の死滅なり。之れ前後の文脈によりて明かなし。キリストに従はんは欲する者は「十字架」を理解承認せざるべからず。『十字架は新約全書中の「偉大」なる一語なれども、通俗には甚だ「小さき」言とせられぬ。我等通常「十字架」に就て語るも、そは我等の性癖を十字架にせることを意味するのみ。されど「十字架」てふ語は決して聖書中に於ては、斯かる薄弱なる事を意味するにあらず。蓋し十字架は一人に對して決して數箇あるものにあらず。「絞首臺」てふ語が唯一を意味するが如く、この「十字架」も亦常に唯一を意味す、即ち唯だ「死」を意味すなり。』

△**十字架の意義** 羅馬政府の下に於て人が磔刑處分を宣告せられたる時には、その人は定まれる死所にまでその十字架を負ふべきを強要せられたりき。「十字架を執れ」てふことは死刑執行場に赴くを意味したりし也。キリスト曰へる如く、人をして「十字架を執りて彼に従はしめよ」、人は問はん、キリストに従へとや、何處に？と。そは疑もなくゴルゴタに！。あゝゴルゴタ！、これキリストが彼の「十字架」を負ふて最後を遂げしところ、人よ其處にて彼と共に十字架上に上らざるべからず。ゴルゴタに就て何事をも知らざるものは、基督教徒の何ものたるやをも知らざるもの也。カルバりに於ける彼れの「十字架」を拒むものはキリストの踏みし道を拒絶するものなり。「十字架」を忌避してその生命を保全せんとする者は之を喪ひ、彼かために生命を喪ふものは之を保全すべし。人若し眞に生きんとならば先づ死せざるべからず。復活により

て天國に入らんと欲する者は、自己を死滅せしめざるべからず。自己意志を壓伏せし時のみ罪は壓伏せらるゝなり。そは自己意思は罪の甚しき要素なれば也。人は「罪」を擲たずして「惡事」を棄て得ん。前者は再生にして後者は改心なり。「惡事」を放棄するとは新習慣を意味し、「罪」を擲つとは新生命を意味する也。

品性を決定するものは意思なり。意思は人の實質なり。故に意思の壓服は自我の壓服なり、他に何物をも意味せず。人は自我を與へずして其の巨萬をも與へ得べし。されど

寄與者なき賜ものは虚無なり。

神と交渉するに際して、その完全を保持するが如きは、人性にとりてさまで困難事にあらず。我等は調和せんと企つ。我等はその些細の一部分を神に捧ぐ。されど、その部分たるや、我等の時、我等の努力、我等の愛、及び我等の實體の一部分にして、常に極少部分に過ぎざるなり。十分の一を與ふるものは仁慈の輝ける模範と稱せら

る。されど神が假令十分の一を求め給ふとも、而も残れる十分の九に對して亦た明かに同じ要求を有し給ふ也。神は我等を十分一造り給ひしに非ず、而も我等亦た自ら十分の九を造りしに非ず。若し神が我等に對して一の要求を有し給ふならば、そは我等に凡てを要求し給ふ也。

或人々は毎年「克己過」を有す。彼等は五十二週に唯だ一週の正しきを有するのみ。されど毎週が「克己過」ならざるべからず。キリストは毎年三百六十日を克己せざるべからざるを教へ給へり。『若しわれに従はんと欲ふ者は己に克ちて日々その十字架を負ふて我に従へ』(路加九ノ二三)。一年中に唯一週間のみキリストに従ふ者は天國に入るを得ざる也、これ彼は元の罪に歸れば也。全人類は始終天國の勤勞に與るべきもの也。勤勞とは何ぞ、他に非ず、正直是れなり、神の意に協ふこと是れなり。神は分割せられし心情の一部分を有し給ふに非ず。寔に唯だ其の一部分のみを捧げんか、之れ何の部分をも與へたるに非らざる也。唯だ一部分の提供なりとするも、そは一の條件

に對する提供にして、實は是れ貿易なり、與ふるにあらざる也。若し予が得んがために與ふるならば、予は畢竟與ふるにあらざして投資せるなり。斯かることは商業主義にして決して基督教主義にあらざる也。イエスは『生命を保全せんとの目的を以て生命を喪ふ人はその生命を救はるべし』とは言ひ給はざりき。彼自身のために「その生命を喪ふ所の者」にあらざして、「キリストのために」生命を喪ふものは之を保全すべし。

△犧牲の精神 勤勞に於ける如く、犧牲に於ても重要な點は行動にあらざして精神なり。犧牲の精神は凡てを與ふるに在り、而して世界の大要求を充たすにあり、自己の凡て、物質の凡てを與ふるに在り。

犧牲の完成を主張するは何等の點に於ても任意的のものなりと想像すべからず。抑もは宇宙は神と全く相調和すべきものなり。物質界は完全に一體をなせり。不秩序なる星辰、軌道を逸する大陽又は太陽系あるなく、又た自然の法則に逆ふの原子なき也。

唯全き服従、完き秩序、完き調和あり、之れ晨の明星の歌ひ初め、神の子等の喜び叫べる、其の時に始まれる「地球の音樂」なり。

さはれ凡て此る全き服従に於ては道德美はあらざる也。太陽や太陽系や服従せざらんと欲するも得べからず。於此乎、神は意思を作りたまひぬ。元來自由なる意思の服従なくして道德美はなし得ぬもの也。斯く道德的調和の可能なると共に我意より生ずる道德的不調和は生じたり。若し萬人が自己のためにのみ働くときは、彼等は萬の異見、萬の衝突せる利害、萬の異なる中心點を有し、而して各自の生涯は自己の中心點の方に動くが故に、凡て他人より離れ去りて個人的となる也。斯の如く私慾は宇宙の大分離力にして、不調和の原因なり。唯是等千萬の意思が凡て同じ最高目的を有する時（換言せば唯自己意思が壓伏せられたる時）、一中心を樞軸として完全なる機關を生じ、而して全き道德上の調和あるに至るべき也。

△宇宙一體 宇宙の渾一は其の各部分が相關係し相依頼するが故に可能事たり。無



生物は生物、土壤は植物に、植物は動物に、動物は人に、人は神に夫れく自己を與ふ、而して神は始終その創造の目的に與へ給ふ也。斯くして神の秩序は享受と授與との廣大無邊なる鎖を現示し、各鏈環は其の勤勞と犠牲とを與へて自らも亦た勤勞と犠牲とを受くるなり。勿論無意識の事物、無智力の生命は星辰が無意識に従ふが如く唯無意識に與ふ。されど自ら意識し智覺して勞役犠牲をなすは神自らの如く意識あり智力ある人の高貴なる特權なり。人が斯くして自己の本性の法則と宇宙の法則とを歡んで調和せる時に、彼はその能力に應じて與ふべきものを其の必要に應じて享け得る也。體力を與へんが爲に食物を享け、能力の發達を與へんが爲に智識を享くる也。

凡そ人類はその同胞と、その下にある自然界と、の勤勞によりて日毎に世界的負債を帯べるなり。而して若し人が自ら與へずして唯享受し、已れのために犠牲となれる幾多の動植物あるを承認し、又時と體力と生命自躰とを寄與せる同胞の勞苦によりて如何に至便を得たるかを省み、而かも猶且共同の福利のために高尚なる勤勞と犠牲と

に盡さずして、唯卑小なる自己の利益にのみ之を消費し、凡てを利己に供するものあらば、そは宇宙の負債を拂ひ得ざる憫むべき貧困者として死滅せん也。彼が生命中に虚無となれる勞役犠牲の流れは、世の幸福に反して趨り、自我を縦にすべく倒亂し、而して沙漠のうちに涸れ失する河流の如く彼が生命を枯渴せしむ。

又、與ふるを否む人は自己と世界とを盜むもの也、そは精神界の法則に於て保全せんとするは喪ふことにして、與ふるは即ち保全する所以なれば也。ポーロが『凡ての物は汝等のうちにあり』と言へるは萬事を壓伏せし人に對する言なり。そこに至靈驚異の數學あり、即ち減法を用ひて加算となり、除算を用ひて乘法となる也。豈驚くべきの法ならずや。

こは畢竟『與ふるは享くるよりも福』なれば也、賜物の貴ければ貴きだけ、之を與ふるは懶々祝福たれば也。而して自我は最高貴のものなれば、之れを與ふるは我等の堪え得る最高幸福なり。神が絶體完全の壓伏を要求し給ふに當り、『設令何ものかを要

し給ふとも、『生命を沒收せんとするに非ず。神の我等に與ふるを要求し給ふは、我等が、神と調和し、宇宙の法則と調和するの幸福あるを知るが故なり、我等に總てを與へよと要求し給ふは、是れ我等が其の最高幸福なるを知るが故也。

▲此の法則の範疇 又此法則は一個人を含むのみならず、凡ての人種をも包有する闊大なるもの也。何等の除外例なきなり。神は階級法制を作り給はず。キリストの曰へる『若し我に従はん」と欲する者は』といふ語は貧も富も、凡てを含蓄せる也。又、何人も犠牲たるべき者なるのみならず、犠牲の方法も凡ての人が同様なるべき也。見よ、傳道師にも富豪にも公子にも農夫にもその語は同一なり、『然れば此の如く爾曹その所有を盡く捨てざる者は我弟子と爲ることを得ず』(路加十四ノ三三)。

凡ての人類を包括すべく樹てられし此の犠牲の法則は、人間が爲したる最高最貴の貢献なり。凡ての人民中に於て、凡ての時代に於て、他人のために死を賭して高尚なる犠牲をなし得る少數人あり、而して斯かる人々は殆どん神に近きものとして讃へら

る、なり。彼等の榮光は凡人の企及すべからざる高き思考より輝き渡るなり。然れどもイエスは信じたり、收税吏と罪人、盗人と娼婦と、の如き人種の別を否認するは、キリストのために全く自己を委ぬるの要件にして、高き偉人たるの資格を爲すなり、而して爾來今日に至るまで此の崇高なる信仰を否認せる時代はあらざる也。

その最も墮落せる代表者にある利己性は、慥に利己心なき王國に入るの資格なり。されど如何にして？自我は自我に打克ち或は自我より脱却し得べきか？。

茲に利己心のために唯一の解毒藥あり、イエスが第三の社會大法即ち是れなり。

### (三) 博愛の法則

我等は利己の勤勞と犠牲とは基督教にあらざるを見たり。同じく愛にも基督教にあらざるものあり、そは無我にあらざれば也。愛に天然的爱あり、其の進化は、他人の生命のためにする苦闘を以て始まり、その精華は、家族の愛情、及び愛國心に見る如く、天然の優秀高貴なる産出なり、されど明かにそのうちに利己の要素あるを免れ

す。

△無我の愛 無我の愛は神聖にして、實に神なる愛なり。その愛の人の衷心に萌すや、新なる生命、聖なる生命、及び永久の生命は之に来る也。是れ凡ての生命の如く進化するものにあらず、以心傳心する也、上より賦與せらるゝ也。死せるものは最早「生命の勢力と可能と」を有せざるべし。無機物が有機物となるは何時あるか、其の生より死に直通し能はざるは、植物の生命が生と死との間隙に往來し居るが故なり。その行列たるや測り難しと雖、その事實たるや明々白々たり。

之と等しく精神的に死亡せる人は精神的に蘇生し來る。その方法たる彼の植物に等しく測り難しと雖、事實は等しく明白なり。新生命は進化發展して來るものに非ず、そはイエスの云ひ給ひし如く「上より」來るべきものなればなり。

我等は事實を無機物より動植物を経て人類にまで順次に審査するを得、而して其の向上し行く歷程に於ては生命が他に吸収せられ、同化せらるゝ以前に於て、或準備

を條件とするものなり、斯くて之を一段高等界に陞し、而して一段高き法則に従はしむる也。草は牛の躰中にて生きんが爲には先づ自ら死せざるべからず、又牛は人の躰にて生きんが爲に先づ自らを殺さざるべからざる如く、人も亦一段高き生命即ち神の生命に入り得る前に自らを死せしめざるべからず。

△私慾 予は私慾なるものが天國の大敵にして理想世界の實現に主たる妨害物なることを前に明かにしたり。若し人が天國に入らんと欲はゞ、須らく無我の勞役、無私の犠牲の法則の下に來らざるべからざるを見たり。而して此事たる本能的の人には不可能に見え、又た復活せざる間は事實上不可能事たり。若し無機物に對して芽ぐみ花咲き終に果を結ぶべきことを望むとも、その物が依然無機物たる間はその望や不可能事たり。無機物が植物界に陞上するまでは、植物界の法則に従ふ能はず。然れど無機物が生活し始むるに至れば、生活の法則に服従するは曾て全然不可能事なりし如く全然自然的となる也。

私慾の人は無我の勤勞、無私の犠牲をなし能はず、而して彼は他人のかくなす理想に對して甚だ嘲笑を逞しくするもの、如し。斯る人は『神の國を見』んとするの前、先づ高さより生るゝを要す。然れどその人が自我に死して天國の新生命に上り、後は、曾て彼にとりて不可能、不可思議なりし事も、今は破蕾一番せし花の如く、自らにして、美はしきものとなる也。

△動機及び其自覺 人々は動機なくして行動し能はざる也。心情は空虚を厭ふ、これを空くするの唯一方法は之を満たしむるにあり。若し天國の市民にして私慾のために勤勞せず又た犠牲とならずば、然らば他人のために之を行はざるべからず。而して此他の動機は無我愛によりて成就せらるべきもの也。之れ實に彼等を新たにし、神聖なる天國に引き上げ、而して彼等をして此法則に従ふに適當ならしめたる新生命なり。斯の如くにして基督教的の愛は基督教的勞役と犠牲とを可能ならしむ。然り、此の勞役や、犠牲や、實に行爲に表はれたる基督教的愛なり。

その動機の上に明かなる自覺を有し、而して勞役が愛のために爲さるゝ時は、勞役犠牲が困難不快なればなる程、愛の表顯は益々完全にして、満足も亦甚大なり。愛は困難なる課程を愛好す。決して嘔々せずして、凡てを與へ又多く與へんことを望む也。ネザン、ヘールは、將に死の手に捕へられんとして猶ほ絶叫すらく、『予は我が國の爲めに擲つべき生命の唯一個なるを憾む』と。されば予は敢て信せんと欲す、ポーロ、エツキサビア、チャツドソン、及びリヴィングストンの如き人々は好んで自己の永生それ自身を擲棄せしとを、若し是を以て人々を救ふとを得べくんば彼等は喜んでその身を死の手に投じたることを。彼等は榮光ある犠牲の生涯を送りしもの也、蓋し彼等は光輝ある愛の生涯を送りたれば也。

△榮光 茲に至て我等は神の眞の内なる榮光を捕へ得たり。我等は時として、眞の榮光を知覺に現はるゝもの、如く、目を眩惑せしむる光輝なるかの如く、或は理解を超越し、想像を踰躋せしむる、知絶、強絶、無量の榮光なるかの如く考ふ。されど此處に

最も秀でたる榮光あり、そはイエスの光明なり(希伯來その一の三)。或希臘人の彼を見んとを冀ひし時、彼はいへり『時は來りぬ、人の子は將に榮光のうちに入らん』と。期待せし弟子等は恐らく或權威の驚くべき顯現に接したりしならん。恐らく彼等の主は王者の權威を有ち、君王の榮光を示現したるならん。彼等がさばかり永く期待し居たりし時は終に來りき。而して熱心なる弟子等はキリストの『誠に寔に我れ爾曹に告げん、一粒の小麥が地に下りて死なざれば小麥はその儘残らん、若し死すれば多くの實を結ぶに至るべし』てふ語を聽くなり。キリストは榮光に就て語り又死に就て語れり。『人その生命を愛するものは之を喪ひ、此世の生命を忌むものは永生に入らん』。彼が來臨の目的たる、その『大なる時』(彼の苦悶の時)の近づくを見し時、彼の靈魂は惱めり、而して彼は禱りぬ、『父よ、爾の名を賞め讃ふ』。時に天より聲ありて云ふ、『我はそれを崇めたり、猶再び崇めん』と。而して審判の崇嚴なる時には神を賞讃へざるべからずとの確信を以て、キリストは大に歡んで叫ぶらく、『此世の王は今や取り去

らるゝならん。若し手にして此地球より天に陞されなば、予は凡ての人々を予の所に引き入れなん』。死なざるべからざる死を表明して彼はかく言ひし也(約翰十の二三)。榮光ある死！榮光ある十字架！。

弟子等のキリストの榮光に對する概念は甚異れりき。野心に富めるヤコブとヨハネと此の榮光に與らんと欲して、キリストが『榮を得んとき二人の内一人を其右に、一人をその左に座せしめ』んことを願ひき。而してイエスは彼等に語れり、彼等キリストの榮に與らんことを願ふと雖ども、キリストの死の杯を飲み、キリストの血汐滴る苦喚のバプテスマを受くべきことを知らざる也と。

逾越の節筵すきこしに當り、イエス、ユダに曰へり、『爾の爲さんとする所を速に爲せ』と、而して彼ユダは賣すべき約定をなさんが爲に直に出で行けり。さればユダの出で行きける時にイエスは曰へり、『人の子今は榮を受けん』と、而して神はキリストによりて榮あり。(約翰十三の二七)

古來未だ嘗てイエスの如き偉大なる働きをなせし豫言者あることなし、されどそは今日の世界をして驚異的注意を惹かしめ得るの奇蹟にはあらざるなり。彼は未だ人の語らざりし事を語り、されどそは今日人々を引き付け居る智識より勝れたるにあらざる也。耶蘇の偉大なるは人類を高く牽き上げたる『キリスト』なるにあり。智識と權威との永久の奇蹟たる十字架にあり。神の智識は、人間利己心の暗中に火を點じ、神の權威は人々を暗きより牽き上げるなり。

十字架は唯單にキリストの生涯の崇高なる偶發事にはあらず。その驚くべき最も氣高き祈禱(そは彼の十字架に上るべき數時間以前なり)の中に、彼は曰く、『オー父よ、今我をして爾と偕に榮を得させ給へ、……創世より先に爾と偕に有し所の榮を得させ給へ』(約翰十七の五)。彼の顔は大陽の如く輝き、彼の衣裳は光明の如く白かりき、而も其時、彼は「變容」の榮えを得んがために願はざりき。(馬太十七の二)。

彼は世の未だ有たざりし以前より有てりし永久の榮えを得んがために祈りしなり

き。而して彼の祈禱は聽かれたりき。彼は『この世の創造より殺害せられし小羊』の榮えを與へられき。是れ彼が彼の『父』と共に有せし榮えに外ならざる也。然り是れ神の本質たる永久の榮光にして、自己犠牲の榮光なり。自己犠牲は神の最上の榮光なり、蓋し是れ自己の最完全なる表彰にして、愛の最上なる表顯に外ならざれば也。

巴里コムミエンの時代に羅馬舊教の大僧正は牢獄に投せられ、死罪を宣告せられき。彼の座せる獄内の密房には狭き十字架形の窓ありき。彼はその窓の頂點に鉛筆にて「高」と書き、その底邊には「深」、その横の一端には「長」、他の一端には「幅」と書きたり。蓋し是れ神の愛の深長幅を度るの十字架にして、その榮えと權威との秘密なり。

△相愛 「爾自身の如く爾の隣人を愛せよ」とは申命記と同じく古き戒律なり。イエスは其弟子等に云へり、『われ新誠を爾曹に予ふ……予が爾曹を愛する如く爾曹互に相愛せよ』(約翰十四の三四)と。イエスは死を以て人類を愛したる也。黄金制度は整正

せる社會の法則としては可也。されど今日の社會は不規則なる社會なり、疾病に罹れり、利己心のために病めり、而してその唯一の奏効すべき治療は犠牲的愛あるのみ。

人々殊に凡人は斯かる愛を實行し能ふや。イエスは其の禱りの中に曰へり、『爾(神)の手に與へし榮を予は彼等に授けたり』。(約翰十七章二二)キリストに與へられたる自己犠牲の榮光を彼は其弟子に與ふ、蓋し彼はその愛を以て弟子等を鼓舞すればなり。従て、貧窮の人、無智の人、肉慾の人、昏迷の人をして犠牲的愛を行ふの資格あらしむる也。

愛すとは自我を與ふる事にして、愛は其目的物に自らを與ふる也。故に相愛たるや、之を譬へば二個の自我の交換に過ぎざるなり。二個の生命の一體となるに過ぎざる也。昔し交友の狭小なりし時に於ては、人々は名の交換を行ひて、爾來恰も彼等の自我が交換せられたりし如く、各々互に他の名を呼はるゝに至れりき。

キリストと我等との間に亦た之と等しきものあり。我等が自らを『神の子』と呼び得るために、彼は自らを『人の子』と呼びたりき。我等が神聖となり得るために彼は人間となりたる也。而して此交換が遂行せられし時に悦樂と幸福との成就是ある也。之れ愛の完成なれば也。

婚姻に於て妻は夫の名を取る、これ便宜上の合體の爲にわらずして寧ろ合體を表明するが爲なり。彼等兩人の利害は今や同一となり、而して多くの場合に妻は夫の生命をその生命とする也。之と等しく我等がキリストの名を徒らに負ふにあらざれば、我等は『基督教徒』と呼ばるゝなり。蓋し是れ、多少は不完全なりと雖、而かも或意味に於て、我等は同じ至高の目的を有し、天國の實現を急がんがために喜んで勞役し犠牲となりて、キリストの生命を生命として送りつゝあるに由る也。

人が神に自己を捧げ、神も自己を人に與ふるの時、神の生命は人に入り、而して彼は勤勞的犠牲的愛の生命なる神の生命に入り始めん、而して人々が神と一體なる間は、彼等は相互に一體たる也。斯かる愛は大なる組織的、完成的勢力たる最高の社會法則

ならん、若し夫れその反對者たる利己心の如き、之を精確に云はゞ、大なる非組織的、非整成的、非社會的勢力なりといふ可し。

而して神に屬ける愛が人間の利己心よりも偉大なることの確かなるが如く、道德的秩序は終に此世の道德上の渾亂に打ち勝ち得るは明なり。

## 第七章 耶蘇の社會訓は社會救済を賚す

英國の一煽動者はいへり『貧困に對する幾多の救濟慈善の如き萬能膏は、木製の脚に膏藥を貼るが如く何等の價値なし。我等の欲する所は經濟的革命にありて敬神の偉人的の解決にあらざる也』と。新經濟組織の緊要なるは疑ふべくもあらずと雖、最も必要なるは新社會精神にあり。單純なる新社會狀態の建設は決して之が救治方策にはあらざる也。形式の變化は要素の變化にあらざる。爰に正しく多くの改革者の誤謬はあり也。彼等は外部より之れを爲さんと欲す、彼等は組織によりて生命を作らんと努むなり。

△**改革と革新** イエスは**大改革家**(Reformer)にはあらずして**大革新者**(Regenerator)なりき、寧ろ彼は革新者なりしを以て即ち改革家なりき。實に彼は新社會秩序を望みたり、然れどもそれは彼れより流露せる新社會生命より來るべきものなりき。『予の來るは



彼等の生命を得んがためなり』。(約翰十の十)『そは予が生くるが故に爾曹も亦生きざるべからず』。(約翰傳十四の十九)

言論出版の自由、普通教育、一般投票等の到來を期待せし高き希望が一部分つゝ實現せられたることは、十九世紀の後半紀、(殊に歐洲に)に於て失望の感を顯著ならしめき。斯かる方法は甚だ重要なり、されど人々が生命の更新を求むるに代ふるに、境遇の更新を以てする間は、彼等は常に失望に陥るを免れざるべし。露西亞の農奴、亞米利加の奴隸の解放は失望されつゝあり。元より何れも正義の大活動なりき、その事たる彼等と聯關して二大名義の下に永遠に光明を發す。されど此處に一言すべきは、是れ亦た唯新生命新精神より來りたる四圍の新情況より發したる結果にして既に一般的期望と成り居りしと是なり。

△發達の二要素 健全なる發達には二個の要素あり、第一は活動的生命にして第二は好都合又は準備的境遇之れなり。孰れを忽諸に附するも愚の骨頂なり。境遇は生命

を作り得ず、而して生命は境遇を度外視して發達すべからず、又存在し得ざる也。

組織するものは生命なり。故に又た形式を定むるも生命なり。然れども我等の既に知れる如く、死物は同化と變化とのために準備せられざるべからず。動物の生命は無生物を同化し能はず、そは必ずや植物の生命を以て準備せられざるべからず。又植物の生命は不適當なる種類又は形式に於ては無生物を同化し得ざる也。例へば薔薇の木の根が土砂を幹葉花辨に變化するには、先づ新化合のために其元素を分解し遊離せしむるに非ざれば能はざる也。

世界の歴史に於て、未だ嘗て、新社會生活の急速且健在なる發達の爲に善き準備たるの状態あらざる也。保守心なる者は譬へば堅牢なる岩石が薔薇の根に同化し難きが如く硬固なり。唯舊組織が崩解せる以上は、その要求は新胚芽の原則を以て適合せられ生氣を附與せらるゝ也。而して新科學の方式は、此遊離崩解の動作を遂げしむ。舊説や舊信仰の打破は唯道を拓くのみならず、却て多額の「準備せる物質」を供給するも

のにして、その物質は生力と接着して、容易に適合せられ同化せられ、かくして新社會組織となりて發達するなり。

理想社會の實現は圖案し建設し得るものに非ず、蓋し社會は活物なれば也。唯だ我等が生命の法則に依るの程度に應じて、之れが實現を得のみ。

ハーバート、スペンサーの云へる如く、「一國民によりて示顯せらるゝ凡ての現象は生命の現象にして、生命の法則に依據するものなり」『正當の生命を獲得せんがための第一重要事は、正當なる胚芽の原則を獲得するにあり。之を獲得せんか、其成長は、生命の法則に適する好境遇を得るに依て速めらるるなり。』

各生物に於て種子は其の發達の形式を決定する所の玄妙なる効力を有するものなり。柵子の中に分け入れればそこに一異象のあるあらん、これ胚種なり、此物の實現補充は、即ち其の柵木となるべき成長發達の凡てなり。之れ萌芽の原則なり。此原則たるや、他の生物よりこの柵を別ち、松楡となりて發生し得ざることを絶對に確實ならしむ。

若し柵子にして自覺あらしめば未來の柵の木となるべき此の「異象」(胚種)はその理想なるべし。さて社會は自覺を得るときには萌芽の原則の如き社會理想を得て、その發達と決定とを以て其の性格を作るなり。人間の理想がその食慾の満足にあらんか、新たなる又た異なる生命の原則を彼に移植するにあらざれば、必ずや、學者、聖人となること能はざる也。而して之れ個人と同じく社會に適用するも亦眞なり。

△**社會的自覺** 産業的革命によりて來りし新社會生命は、社會的自覺と社會的理想とを得つゝあり。此理想は概して物質的なり。生産に關する問題の解決は凡てに對して豊富ならしむるにあり。食に飢うる者が饗宴の夢を見るが如く、永く物質の缺乏によりて苦惱せる人々が、凡て物態の満足が至善となるべき新社會組織を夢みるは敢て怪むに足らざる也。衆庶の社會理想は動物の快樂の天國に過ぎざる也。されば之れを高尚にし精神化することを要す。是れ明かに完全なる物質状態と肉體の健全とを包含すれども、其の重要なるは智識的精神的健全を遂ぐべきの必要條件にある也。故に可能

なる最高社會理想は肉體的、智識的、精神的、社會的なる主命の法則に、總ての人が完全に従ふ一組織にあり。

然れども我等が既に見たる如く、是れ確かに神意（肉體的、智識的、精神的、社會的なる生命の法則は總て神意の表顯なり）が天に於て成さる、が如く地にも成さる、時に實現せらるべきイエスの社會理想なり。

△**社會良心** 新社會自覺の發達に伴つて新社會良心の來るあり。此兩者の密接に關係し、互に他を包含する也。我等が高上發達して自覺を得るまでは一の良心を見出し得ざる如く、社會も亦た自覺に達するまでは一の社會良心を得る能はず。

獨乙改革時代に於て個人は自覺を遂ぐべく警醒せられたり。各人は互に自己の利害を捧げざるべからずてふ真理の認識は、それと共に避くべからざる結果を生せしむ。若し予が神に對して義務を有せんか、（其の義務より誰一人として予を解除し得ざる）然らば予は何人も盗み得ざるの權利を有するなり。命令的義務は讓歩し難き權利を包含

す。故に改革以來其大争闘は權利を確保し保證しぬ。此目的のために革命は組織せられ、戦争は敢行せられ、憲法は採用せられ、法律は制定せられたり。これ争闘の大目的にして成就の豊富なる報酬なり。民主制の發達、奴隸廢止、婦人及労働者の高上は新に獲得したる權利の當然の結果なり。その權利たるや個人が十分に自覺を得たる時に來りしもの也。

社會的自覺の曙光は等しく此世界に光被し、而して人種の進歩の行程に新紀元を印せしむ。

蒸氣電氣の我等に齎らせる緊密にして多大なる關係は我等をして相依らしむ。我等の生命は一なるが故にその利害も亦共通なることを我等は發見す。各人がその場所に適し而して其義務を行ふにあらざれば、軋轢を生ずる程に關係は密接せり。過去四世紀の間改革の標語は「權利」なりき、然れども新社會自覺と新社會良心の發達とは改革の標語をして「義務」たらしめぬ。社會自覺は猶朦朧なり、社會良心は猶薄弱なり、然

かも一方にして明晰なるを得ば他者は勢力を得るに至らん。されば此發達せる社會良心は即ち鼓吹せられざるべからず。

△社會問題 現今沸騰せる大社會問題は倫理的なり。この諸問題は開發せられたる良心によりてのみ解決せらる。而してイエスの社會法は確かに其の開發指導に必要なものなり。

所有權は社會問題の要點なり。將來の經濟問題は財産の生産にあらずしてその分配にあり。蒸氣の到來するまでは第一の大問題は生活に要する貨物を如何にして作り出さんかにありき、而して如何にして之を分配せんかは縦ひ重要なりと雖第二に位したりき。されど製作に自然力を應用せるの一事は生産問題を解決したり、而して今日機械の助力によりて普通労働者が數時代以前の普通労働者よりも恰んど五十倍多く産出するに至れり。我等は今世界が消費し能ふよりも猶巨額の物品を生産し得べし。然るに人々は猶衣食の窮乏を訴ふ、之れ唯彼等は衣食に對して交換すべき何物をも有せざ

るが故也。換言せば分配問題は爭論の大主要點となれり。

現時火急を要する數種社會問題あり。今や競争場は全く放任せられたり、財産問題——財産の分配——は各人の根底に横はれり。「誰が所有權を有する。佛蘭西の哲學者ブルードンの言へる如く、「財産は掠奪の結果なり」とは眞なりや。若し誰か所有權を有するならば、彼が持つべき權利の總額に何等の制限ありや。等額に享受すべき他人が缺乏せるに反して、人は生活以上の剰多額を持つべき權利ありや。縦し人に所有權ありとするも、之を好むがまゝに消費すべき權利ありや。誰か土地を所有する權ありや。土地は之れ總ての人の自然に繼承すべきものにあらずや。凡そ人は生くべき權利ありや。さらば人は生活の方法に就て權利を有せずや。而して彼の好む生活を爲すべき權利ありや。人は自己發展(自己の最上を爲すべき)をなすべき權利ありや。さらば如何にして此權利を確保すべきか。そは体格の健全なる各人のなすべき義務にはあらずや。さらば如何にして其の本分を實行すべきか。各人は働くべき權利ありや。さ

らば其人の義務は役せらるゝことならざるか。労働は總ての健全を確保すべきものにあらざるか。労働の権利とは何ぞや。資本の権利とは何ぞや。此兩者の關係は如何。若し人権利を有するならば亦義務をも有せざるか。各人の義務とは何ぞや。組織ある労働と組織なき労働の關係は如何。組織なき労働は権利を有せざるか。産業的勢力の集注は政治的權力の分配と如何にして調和せらるゝや。換言せば、如何に組織せられたる産業が、民主制と調和せらるべきや。』

△**権利が義務か** 是等の諸問題の一たりとも分配問題を含まずして解決又は論議するを得ず、而して之れ政策の問題としてよりも寧ろ道德問題に近きものにして、人々が権利よりも寧ろ義務に力を注ぐべきなり。イエスの社會法は権利を以て理せられず、義務を以てせらるゝことを注意せよ。

義務は與へ、権利は取る。人が権利に力を注ぐ時は、それは自らの爲めに求むるものにして、義務に力を用ふるときは即ち他人の福祉の爲めに求むるもの也。人が他人に

代りて役せらるゝは之れ義務にして、之れ屢々異論を協定すべき第一歩なり。人々が争ふ時にはその「権利」を越ゆるものなり。立法部や法廷は義務よりも寧ろ権利を以て第一に扱ふなり。彼等は義務を承認し實行すれども、唯かゝる時は一人の義務が他人の権利に包含せらるゝのみ。今日の立法、司法、經濟、及び社會等の諸組織は凡て「權利」に基出せり、之れ是等の者凡て舊き個人的精神の結果に外ならざれば也。

生命の一体となり、利害の共通となり、福祉の層一層擴張したる新文明は、權利よりも寧ろ義務に勢力を集注すべき社會精神によりて、生氣を附與せらるべく、又せられざるべからず。

故に立法部や法廷は分配問題の純理的解決を施すを得ず。法律は或程度まで貧婪を制限し得べし。法律は、惡事を犯すに難からしめ、善事を勧むるに容易ならしむるによりて、惡事を寛和し得べし。されど人各々占有を専にせんとし、而して或者が他人より強き間は、分配問題の上に争鬪は尙ほ存すべし。

△私慾の撲滅は急激なる解決方法也。惡の根元は私慾なり、故に之を剷滅するは、此社會問題の唯一の急激なる解決なり。

さてイエスの立法(勤勞、犠牲、愛の法則たる)は、人間の利己心の根絶を助くるにありき。是等の法則の根底は一にして愛の法則即ち之れ、而して無我愛は利己心の全き反對なり、全き救済法なり、唯一の救済なり。

二三の例を列擧するを許せ。彼の猜忌と憎惡とを生むものは、財産の不平等なる分配にあらず、私慾即ち之れを作用せるのみ、茲に人あり、彼をして適度の生活を爲せる隣人より富裕ならしめよ、而して彼の歳入を公共福利の爲に用ひしめよ、然らば彼の富は猜まるゝことなかるべし。彼は已れの所有物を注意す、公衆は彼の爲に幸福を得るなり、之れ彼は基督教の家宰を眞に了解すれば也。予は卑賤の境遇の或人を知れり、その人は慈善のために廣く知られ廣く愛せられたる一婦人の死を見送らんがために誌して曰く、『予は貧困者なり、されど婦人が一仙を得たることを猜ます、予は彼女

がその有せしもの、二倍を有するを希ふ』と。

資本と勞働とが基督教の勤勞法則の下にありと想像せよ、さらば既に腦と手との間より以上の争はあらざる也。若し勞働組合が十分なる勤勞を目的として組織せられ、資本家合同が被雇者と一般公衆との福利のために組成せば、我等は既に同盟罷工や工場閉鎖など聞くことなかるべし。

△實例。現時の一特色として一般に深刻なる不平あり。そは生活資料の大分配を得んと冀ふとなり。予は勞働が其の適當なる分配を受くとは考へざるなり、されど靜にこの分配より一層大なる或ものを得たるを悟らば、その不平は不平とならざるべし。數年前、ホームステッドに悲しむべき一事起れり、そは二百五十六人の同盟罷工なり、彼等は平均一日十五弗の勞錢を取り居りしも満足せざりし也。予は思ふ、與へずして却て貧りの生活を送れる普通の富豪は、彼等勞働者と同じく不平を感ずることを、唯富豪は社會組織を非難せず、故に激動せざるなり。一般不平には正當の理由ありと雖、

その根本的原因是勤務精神の欠乏にあり。某組合教會の牧師は予に書を送りて曰く、『予は満足してかく言はんとす、「労働階級内の此の凡ての不平と、其の原因とは、給料に依頼せる教授、書記、司簿、官吏、僧侶中の優秀者の間に存在せり。米國にて、五十年間にその給料より一千磅を貯蓄し得る牧師は千人中一人もあらざるなり、(中略)。さるを如何なれば労働者の如く凡ての牧師等が不平を唱へ「同盟罷工」を起さるや、(中略)。予が料理人は我が高等學校に教鞭を執れる教育ある若き貴女よりも多額の報酬を受く。予が雇人は予が一時間の労働よりも其の一時間の労働のために多額を受く、而かも又、彼は牧師の平均給料よりも多額を受くる也。』

料理人は縦し多額を受くると雖、高等學校教師よりも満足を感じること少きは疑なき所也。料理人は恐らく單に給料のために働き、それ以上何物をも受くることなし、然るに教師に至りては若し其働かしが其の給料の上よりも、生徒の上に多大の利益あらば、彼等は多少勤勞の精神によりて満足を知る也。勤勞精神が一般に普及する時は

一般の不平は其跡を絶つに至らん。ホンカルロル、ドクトル、ライト、(誰一人として彼以上に聰明なる判決を作すに適當する者なし)は去年(一九〇一)八月書して云へり、『社會、道德、産業等の状態に就て多年研究したる後、予は實業行爲の實際的信條としてキリストの宗教哲學を採用すべき結論に到達せり、茲に人心を激動せしめ又た社會的、産業的、政治的革命的の近けるを思はしむる難問題に對して、確然たる迅速なる解決を見出したるなり、而して予は又た同じ見解に歸するなり。』

此事たる單に一の説たるに止まらず、又産業に基督教主義の實際に採用せらるゝは僅少の場合に止まらざる也。パリシアンハウスの書家たるクレアの有名なる實驗はイエスの教訓に基き、イエスの精神によりて鼓舞激勵せられたるもの也。レクレアはその死の床にて書きぬ、『予は我等が他人に爲されんと欲ふものは之を他人に爲し、已れの如く隣人を愛せよと語り給ひしイエスの卑き弟子なり、予が最後まで基督教徒として立つを願ふは此意味によりてなり。』

コロンブスの知名の製造家オハイオ書して曰く、

『我等は常にその被雇者を我等と同じ感情、同じ希望、同じ権利を有する人として取扱はんこと、及び交互利害を有する一大家族なりと考ふることを努む。予は我が被雇者が予の爲に盡す如く彼等のために多く盡さざりき、然れども吾等の地位が轉倒したる時に、予が受けんことを欲する待遇を以て、予は今彼等を待遇せんと欲するなり。輒近三十年間の我等の關係は常に友情と満足とを以てしたりき、我等は決して何の同盟罷工又は葛藤を有せず、全然とにはあらねど之れ我が被雇者の品性に負ふ所多し。此の例として予は一八九三年の恐慌の間に起れる偶發の一事を語らん。

恐慌の起りし凡そ一ヶ月後大なる商會が各方面に於て失敗したりし時、或朝我が設立せる工場 of 代表者十五六名は予が事務所に来れり。彼等の態度は極めて嚴格なり、予は決して我が被雇者と何等の争ひを爲さざらんとを熱望せしに遂に争の來れるを怖れたり。終に談判人たる一人は云ひ出てぬ、彼等が予の計に來るに決したる以前に、

提出すべき個條に付永く考へたりし事、而して彼等の要求に予の同意を望むる事、彼等は、從來多くの恐慌の壓迫にも屈せざりし大なる商會が毎日倒る、を見し事、我が倉庫には賣却し能はざる貨物を以て満たさる、事、而して我等が他の者の如く既に賣却したる貨物の支拂を受くる能はざるを推測し、我等が他の商會の如く危険に陥るを怖る、事、彼等の或者は數年、若くは多年、若くは一時代の永き間我等の爲に盡したる事、彼等は常に公平に賃金を受け、而して少額を貯へたるが、其個人の貯蓄は多額ならざりしにせよ總額は著しき額なりし事、而して若し必要ならば會社の使用の爲に其額の全體を予の處置に任せんがために談しに來りし事等なりき。

予は未だ嘗て遭遇せざりし感想を以て満たされたれば、如何に之れを告白せんか其言葉を知らざるなり、そは唯人の推察に任せなん。』

南米の或る大なる鐵及石炭會社の社長は書して曰く、『予は高き賃金が必ずしも常に人を満足せしめずとの意見を有せしが、之が是非を決定すべき事は起れり、予が判断



によれば愛は如何なる時、如何なる場合にも事件を制御すべき唯一事なりとせり、而して人が職工を愛し職工をして彼を愛せしむるに非んば、彼兩方とも事業を經營する間に於て、凡ての苦しき苛責の下に事物を制御すること能はざる也。予が判断によれば我が職工の仕事に於て、彼等が唯金錢にて満足せざる時代は來るなり。

換言すれば屢々恐惶は彼等の頭上に落下すべし、即ち彼等は何物も彼等を満足せしめず、唯彼等の雇主に愛せらるゝと感すべき心の状態に満足するの時あらん。若し製造家が彼の管理の下にある人々を眞に愛するを得ば、彼等を僕婢として視ず、友人として視るに至らん。而して彼等をして、彼の寛大は特に謝恩を待ん爲の賜物なりと感せしめず、却て公平に彼等に所得を分配するは彼の愉快なりと感せしめ、而して彼の愛と同情とを彼等に確かめ得べき也、斯くて急激なる恐惶の襲來ありとも彼は彼等職工を駕馭し得べき也。されど予は如何なる製造家も、先づ「神」が首長たるを確認するに非んば、彼の被雇者を率ゐるに成功すべき首長となることを得とは思はざる也。

予は曾て我等が諸所の鑛山に於ける或る甚だ困難なる地位を解決したり、我等を圍繞せる凡ての鑛山が劇しき同盟罷工によりて閉鎖したりし時、大團體の人々をして従前の如く勞働に就かしめたり。されど前に述べし如く予は將來に常に之を満足に解決し得るや否や斷言する能はず、されど予の判断によれば、斯る行爲は適當の處理にして、而して良心に於ても資本のためにも、最上の結果を來すならん。

同人の他の書柬より予は次の一節を引用す「力にて征服せられたる人は全き服従にあらず、彼等が他の機會を得るや再び反抗し事物を破壊すべし。されど一度愛と道理とによりて征服せられたるものは心服すべし。是等の人はかく打ち勝たれたる後、その周圍の事物を以て十分満足す、されどそは眞の改變ならざるべからず、然らざれば保持せられざるべし。予は信ず、若し人道の愛と公平なる行爲とが雇者の行爲の脊髄たらんか、彼は來るべき恐惶を巧みに駕馭するを得べし。」

是れ明かに、イエスの社會訓が新たなる社會的理想を精神化し、完全にすべく、新

たなる社會良心を育成すべく、社會の不秩序に對して急速なる救済を與ふべきことを示すなり。

## 第八章 耶蘇の社會訓は精神的復活を齎す

△現時の教會 教授ブリユース叫んで曰く、『現今の狀態の下に教會の勢力を張らんは不可能事なり』と。

教會は「扶持」せらるべき甚だ貴げなる制度となれり。基督教は教會の内外に於ける個人的生活の上に、生命と鼓舞と力とを與ふ、されど教會は新文明の進むべき道を指導するものにあらず。過去の繼承物を保存するを得んも、將來を企圖するに足らざる也。或程度までは抑制の力あらんも、鼓舞するに足らざる也。

教會の發達薄弱なると、多衆なる勞働者の一般に教會より遠ざかれると、は詳述するを要せじ。是等の事實は年々顯著となり默移暗遷せり。俗念の有勢なると、有力なる精神的復活の深く必要なるとは、詳論するまでもなし。是等の事實を最も深く感ずる者は、最も熱心に教會を愛する人々なり。

前述の目的は次の事を示すにあり、即ち大に教會に生氣を與へ、文化を高度に進め、天國の實現を速かならしむべく苦求せらるゝ大覺醒は、之を求むると恰恫に、其の必要條件は滿され、主の道は準備せられし時に於て、確かに豫期せらるべきものなること  
是なり。

世の最高要求は神なり、實在にして權威ある眞神なり、而して人が現代に應じて神を曉悟せし時、神は人に實在となりて顯はるゝ也。(第一章)

△精神的復活 歴史上の大覺醒を察するに、忽諾に附せられし『精神的眞理』(それは確に當時の特別なる必要に應用せられたる)が、忠實に説教せられるゝ時、人々は神を理解するなり。精神的復活の特別に必要なものは、或活ける眞理の等閑より來ることを斷言し得べし。時代の必要に確かに適應せる、而も等閑視せられたる眞理は、忠實に説かれし時、新眞理の權威を以て人々を深く感せしむ。(第二章)

我等はイエスの社會訓は晩近に至るまで殆んど全く閑却せられ、さなくとも一般に

誤解せられし事を見たり。イエスの説教の大主旨なりし天國は、普通に誤解せられ、天國の根本的法則たる社會的性質は、忘却せられたり。(第二章)

我等は、イエスの是等の社會訓の研究をなしたり、而して其の天國はイエスの社會的理想にして、神意の天に於て成る如く地に於ても成さるゝものなると、換言せば理想世界即ち之れなることを發見したり。

△天國の眞觀念 社會的理想たる天國の眞の概念は、手袋の手に適する如く現時に適すること明瞭になれり、現時の甚しき物質主義によりて、彌々流行せる俗念(神の實在の實際的拒否)ありと雖ども、而も天國の一部たりとも正解せらるゝ時は、物質は我等と精神的現象との間に障害物たることなく、我等が精神的復活に通達し又た感化を得べき媒介となるに至る、鳥翼は鳥の身體に重量を加ふれども、之が運用を知る時は鳥をして飛ぶに適當ならしむ。(第五章)

又、永年懐きし信仰を一掃して、疑惑の零圍氣と生せし心の科學的傾向は、人々を

してキリストの基督教に歸らしめ、同時に彼の天國の教義のために道を拓きぬ。

△科學的觀念　且自然法の科學的觀念は、多々の人をして人格的意思の除去によりて物質界より神を排斥するもの、如く見せしめ、斯くして流行せる俗念を益々大ならしむ、されど我等は肉體的と精神的との合成たる天國の眞の概念は、神をして自然の中に内在せしむるを見る、法則は唯神意の表顯にして　攝理と祈禱に對する信仰の合理的基礎を與ふ。(第五章)

神の非實在に見え、又は實際世界より離る、他の理由は、人が常に兩半球を別てる想像線を劃するが爲なり。例へば此線の一方には假令無神にあらずとするも不信仰の「世俗」あり、而して他方には北半球の如く世界の民人の多くか接める精神的半球あり、となす如きはなり。吾人は天國の眞教義が、空想にして誤謬なる此線を拂ひ去るを見たり、而して神を事業と日常行爲との上に引き戻すを見たり。(第五章)

又、我等は天國の眞教義が、教會の眞使命を明かならしむることを見たり。教會が此教義を遵守せし時、其使命を果すべき一段高き進歩の道を登るならん、教會にして天國の物質的要素を承認するを誤らば、人類の物質的必要に對して其義務を盡し能はざる也。

イエスは「隣人」の例話に於て、痛傷を負へる旅人を傍觀して行き過ぎし二人の教會員と、之をいたはれる一人のサムリア人を示せり。而して何所にて惱める人に遭遇すとも、「愛」は己れを其人の隣人と思はしむる事を示したり。

△物質的要求　イエスは肉體の苦痛と要求とを承認し、是に鞅掌したり、而して斯く爲さんか爲に最も無智、卑賤の者にも會得し能ふ所の愛の證を人々に與へたり、彼は卑き自然を通して高きに達したり。彼は多衆人の生活せる肉體の平面に下りて、人々を保持し、而して彼の生活せる精神的平面に人々を導きたり。世の肉體の苦惱は教會をして精神的要求に鞅掌せしむべき大なる機會を供す。

健設的なる教會即ち基督教青年會と、救世軍とは凡て肉體の人を承認す、而して是れ

一般の教會が手を達する能はざる所の階級を、確かに引率せることを明かにする也。

オハイオのゼ、ミアミ、アッソシエーションは、シンシナチ及近邊の廿三個の浸禮教會を包有す。その二教會は「健設的」(社會運動に投ずる如きを意味す)なり、舊式に固着せる多くの教會が、撲滅又は驅逐せられし程不利なる境遇に在りしに拘らず、廿三教會にて信仰の告白をなせし三百二十五人中二百九人は、此の新式を採れる二教會に於てせられしなり。但し此二教會の會員數は其の年の初よりも終に於て四分の一の少數となれり。

最初のメンヂスト及びロルラルドバイブルメンの活動に於てトルルド、ロージャーは云へり、『予は、凡て成功する宗教運動は、彼等が感化せんと努むる人々の徳性を高め、物質状態を改良せんと志せるにあるを真なりと信す。』

佛蘭西革命後一の『社會的教理を以てせる不信仰の傳道が、殆んど現社會を野蠻の渾沌に返らしめたり。』獨乙に於ては、人民が教會より疎絶する事、歡迎せらるゝ階級に

比して彼等の貧困激甚なる事、彼等が泥酔と悪習とに陥る事等に由りて社會は腐敗に趣けり。凡ての點に於て人々の生命に接觸し、而して社會の弊所を治癒する改良的活動と建設(都市組合、孤兒院、養育院、病院、女執事制度等)とを以て世に擴がれる「インナーミツション」の創立は獨乙國及び獨乙教會の救濟なりき。

△吾人の希望　人道の爲めに大熱心を有せる教會の會員等が、終夜眠らずして企圖することは、如何にして金錢を得んかにあらずして、寧ろ如何にして「人」を得んかにありと想像せしめよ。彼等の至上の願望は廣く世のため又特に彼等共同のために助くるにあらん。彼等は道德上にも肉體上にも悪魔を退治せんとして日毎に苦闘し、世に來るべき幼兒に良境遇を與へんと試むべし。罪と無智と苦痛とより人々を救はんがために望みつゝ、働きつゝ、祈りつゝ、彼自身と其の資産とを消費しつゝ、我等をして全教會が此目的のために合同すと想像せしめよ。如何なる變改が此の如き教會をして共同の活動を有せしむべきか。如何にして之れを多數に及達すべきかよ。如何に成長すべき

かよ。如何に話され書かるべきかよ。人は其の働きと成功とを學ぶべく巡拜するならん。加之、斯かる教會は少しも獨特なるを要せず。之れイエスの社會理想を以て染められたる教會員を以て成る教會の單純なる描寫にして、勤勞、犠牲、愛の社會法則を嚴格に執れるもの也。而して此描寫たるや、各合同に於ける各基督教會の肖像たらざるべからず。若し然らば幸福に滿てる天國の到來まで幾何時かあらんや。未だ嘗て採用せられざりしイエスの教訓中に、非常なる力あり。唯だ堰中の水の如く決して水車を廻轉せず、坑中の石炭の如く決して燃え揚らざるのみ。

△先づ實驗せよ。若し僧侶にして此の未用の力を感せんと欲せば、先づ之を經驗せざるべからず。誰か能く自らその力の深き人格的經驗を得ずして權威を以て眞理を説くべけんや。ルーソー、ウエスレー、フィンニー及びムーデーの唇より出で、大なる力ありし眞理は、先づ彼等自らの心情の中に大なる力ありし也。我等として我等自身を始めに與ふると想像せしめよ。而して吾人が無我の勤勞に従ふことを確實ならしめ

よ、然らば我等自らゴルゴタにありて十字架に刑せられ、而して「我等」は死を以て犠牲となり、而して我等の生命はキリストの生命となるべきは確然たり。我等自身の心情が、神と人との磅礴たる愛を以て熱し輝くこと又た確然たり。然らば我等は是等の閑視せられたる眞理が、教會員の眞に基督教的勤勞、犠牲、愛の爲に立つまでは、大なる力を以て説教せらるべき事を豫期し得る也。而して此の神の福音こそ實に今尙ほ神と信する多數人を救済すべき神の力なり。

此に至れば良心を覺醒するは、さまで困難事ならざるべし。俗人は信ず、自ら基督教徒と稱する者も其實質自己と同じく、唯だ俗人は自ら然らずとせるの點に於て異なるのみなることを。眞實の差別を見ざる限り、彼は自ら満足にあり。されど教會員が一般に營む勤勞と犠牲との生涯が彼の丘上に建設せられし市の明かに見ゆるが如く、天下に顯著なるに至らんか、其時こそ私慾の人が罪の宣告を受くるの時なれ。

△神實地の時。神が人々に「現在」となりし時、罪の鞫は眞實となる也。而して神

が今日の眞理てふ語に於て、又た毎日の生命として解釋せらるゝ時、茲に始めて實現せらるゝ也。

イエスの社會訓(固と圓滿に適用し得べき)が現在の状態に適用せらるゝの時は來らざるか。

眞面目にイエスキリストを納るべき時は熟し來らざるか、我等をしてイエスの云ひし事を行ふか、又は彼を主と呼ぶことを廢するか、何れかを撰ばしめよ。我等若し神の實現を望まば、吾等をしてイエスに従はしめよ。

英國レイグートなる古寺院の厩庭に於て『決斷の木』と稱する有名なる一木あり。嘗て貴女ヘンリー、ソムマーセットが、其の生涯の暗黒なりし時、此の木の下に立ちしことあり、當時彼女に對して人生の基礎は將に消失せん許りなりき。彼女は果して神有りやてふ怖ろしき疑問によりて苦悶したりし也。時に天啓は彼女に來りぬ、『われ在るが如く汝の生涯を送れ、然らば汝は予の存在を知らん。』終に決斷は成されたり、神は彼

女に「實在」となれり。

世界が神ある如く生活せんか、世界は「實在の神」を有すべし。神の殿堂は人と共にあり、神は人々と共に住めり、彼等は神の人民たり、神は自ら彼等と共にあり、而して彼等の神たる也。

## 廿世紀の大覺醒 終





も亦た之を信ず、夫の近世の革命が其の嚆矢と『宗教の自由』に放ちたるは、蓋し當然の事なりと云ふ可し、ルーテルや、ツィングリーや、近世自由史の先驅者指導者として最も卓出せる偉人と言ふ可し。

近世自由の革命は、宗教に始りて政治に終れり、即ちクリスチアンに依て放たれし自由の曙光は遂に政治上に及びし也、見よ、歐米の人民が封建的専制政治の羈絆を脱せんとして革命を企圖せるの時、彼等が懐抱せる理想と計策とは如何なりや、曰く、自由平等博愛、是なり、曰く、代議政治、是なり、然り、自由平等博愛てふ羅典民族基督教の道徳と、代議政治てふ日耳曼民族古代の風習とは、茲に融和結合して近世政治の理想となれる也、基督教の効も亦た大ならずや。

## (二) 第二の封建制度

然るに斯の如くにして建立せられし立憲代議政治は、今や却て當初の教訓たりし自由平等博愛の理想を埋没するに至れり、蓋し第二の封建制度を生せしが故ならずんば

非ず、抑も第二の封建制度とは何ぞや、曰く、所謂産業的封建制度是なり、資本家制度是なり、吾人は茲に改めて資本家崛起の狀を序するの却て諸君を煩はすを知る、されば一言、唯だ其結果に就て述べん。

第一、社會の富は益々少數資本家の掌中に集注するなり、第二、今や萬民政治に參與するを得るの便利あるに至りしを以て、彼等は其財力に依て更に政治の權力を掌握する也、政權と資本との結合は、遂に資本家をして絶對萬能の力を以て萬民の上に臨ましむるに至れるなり、是れ之を第二の封建制度と稱す、眞に妥當なる名稱と言ふべし。

更に恐るべき結果は生ぜり、道徳の敗壞即ち是なり、思ふに今日の工場に於ける雇主と雇人との關係は、又た昔日の如き親愛の情あるを見ず、兩者の間、法律的關係こそあれ、一點道徳の觀念を留めざるを通例となす、而して工藝の巧拙は一に之を機械の構造如何に托するを以て、勞働者は一般に其の業務の上に無趣味となり、従つ

て自主の念は漸く失はるゝに至る、且や資本家は安座して彌々富を増し、富めば益々「遊蕩に耽り、罪惡に陥り、而して勞働者は愈々窮して又や罪惡に趣くの已を得ざるに至る、ア、何たる慘憺の状ぞや。

人は皆な神の子にして、兄弟にして、平等なり、との基督の教訓ありてより、實に一千九百年の經驗を積まれる今日に於て、諸君の眼前には此る慘狀の開展せらるゝあり、而も諸君は猶獨り晏如たるを得るや。

### (三) 活動の新局面

然らば之を如何にすべきや、第一の封建制度を打破せるのクリスチアンは如何にして第二の封建制度を撲滅せんとするや、是れ實に諸君の活動を迎へんとして新たに開展せられたる部面なり、然り、諸君今後の活動は、世界の人類をして此競争の慘劇より脱出して、共同生活の樂境に進入せしむるに在らざる可らず、而して此の目的を達する、如何の方法を採る可きや、所謂慈善事業か、否、所謂改良主義か、否、吾人を

して之を簡單に斷せしめよ、慈善事業は姑息なり、改良主義は苟且なり、刀を社會の骨髓に入れて其病根を絶たんとする、蓋し社會主義に來るの外、又た他に其の途あらざる也。

世に社會主義を反駁する者あり、或は曰く、是れ單に物質主義なればなり、或は曰く、是れ非國家主義なればなり、又た或は曰く、是れ却て個人の自由を束縛すればなり。

物質主義なりとの評や、中らざるに非ず、されど人の性は元と善なり、其の罪惡に陥るは、思ふに境遇に蔽はるゝ也、若し人の天性を圓滿に發展せしめ得べくんば、世又た何の罪惡あらん、吾人は須らく人の境遇を改革して、以て人格の發展を自由ならしめざる可らず、社會主義は即ち人の境遇を改革せんと欲する也、何の物質主義と言はんや。

社會主義は非國家主義なりや、若し非國家的の主義が不可なりとせば、寧ろ其不可

なるは今日の資本家制度に非ずや、蓋し今日の産業は國家てふ門戸を打破して世界的に膨脹せり、而して國家は國家本來の目的の爲に活動せずして、資本家の利益の爲に活動するに至れり、此の非國家的惡組織を打破せんとする社會主義が、國家本來の目的に反するとは、吾人斷じて肯んずる能はざる所なり、又た既に世界的に膨脹せる惡組織を打破せんとする社會主義が、世界的運動を敢てする、何の不可あらんや、若し夫れ世界の人類が相携へて共同生活に入らんとは殆んど總ての學者が理想せる所、獨り社會主義のみの説く所に非ざる也。

社會主義は個人の自由を束縛するものに非ず、個人の自由を束縛する、寧ろ今日の經濟組織の如く甚しきは無し、此經濟的束縛を脱して個人の才能を自由に發展せしめんとする 即ち社會主義の本旨に非ずや。

社會主義は實に斯くの如きもの也、近世史に於ける自由の指導者たる基督教徒諸君、何ぞ奮然として此の社會救済の運動に投せざる。

#### (四) クリスマスの安心

近時頻りに聞く、青年の煩悶多しと、夫れ煩悶あるは其の無きに勝る、蓋し煩悶は安心に入るの階梯なれば也、然るに宗教愈々盛んにして煩悶益々多きは何ぞや、思ふに煩悶は教訓を聞くに依て生ずるもの多し、宗教の勃興するに従ひ煩悶の叫び高き所以也、然らば吾人は如何に此の煩悶の雲霧を排除して安心の天國に入る可きや、基督の福音に曰く「我を召んで主よ主よと曰もの盡く天國に入るに非ず、唯だ天に在す父の旨に遵ふもの、み天國に入る」と、此に於て吾人は思ふ、煩悶は教訓を「聞く」に依て生じ、「行ふ」に依て去ると、即ち萬人平等に神の子たるの實を現世に來らせんとに力を盡すは、吾人が安心を得るの唯一の徑路也。

且つ夫れ諸君は常に海老名先生の奮闘主義の説教を聞き、而して又た眼前に夫の悲境に沈滞する多くの同胞を見るの時、諸君は獨り退いて晏如たるを得るや、今の世に於て獨り自ら煩悶に耽る、吾人は敢て之を贅澤なりと言はん、何となれば多くの同

胞は煩悶を起すの餘裕すら無き者なれば也、嗚呼諸君、クリスチアン活動の部面は今  
ま新たに諸君の眼前に開展しつゝあり、何ぞ速かに蹶起して此に其一身を投せざる。

(明治廿八年五月二十一日「直言」所載)

### (附録二)

## 平民の覺悟

### (一) 緒言

○新紀元社を創立して以來、いかにも待つて居たかの如く、非常な同情と讚辭とを寄  
せられた人も頗る多いのであるが、又た種々な質問にも接したのである、社會主義者  
でありながら、何故に資本家の辯護者たる基督教などを説くか、基督教徒だと言ひな  
がら、なぜ不平黨の空想たる社會主義を唱へるか、社會主義者が宗教を口にするのは  
悪くは無いが、古くさい基督などを今更ら擔ぎ廻るには及ばんでは無いか、汝の唱道

は曖昧では無いか、汝、信仰を説きながら猶ほ物質界の改革に執着するは、是れ汝が  
偽信者たる所以では無いか、といふ様な調子で、非常に熱心な質問に遇ふのである、  
予は之に對して聊か茲に回答して見たいと思ふ、固より淺薄なる予一個の此の事業に  
從ふに就ての覺悟に過ぎぬ。

### (二) 何故に宗教を説くや

○人類世界の現象は、總て皆な一個の生命が開發し行くの外形に過ぎぬことは無論の  
事であるが、併し之を其外形に従つて分類すると種々雜多に分れる、ソコで社會主義  
運動は如何なる部類に屬するかと言へば、無論政治に屬すべきものである、コゝが第  
一に疑問の矢の放たるゝ所で、即ち政治運動に従事しながら、宗教などをヒネクルの  
は餘りに氣長い心掛では無いか、といふ問が出る、予は此の議論を至極尤もと思ふ、  
乍併其れは平常の場合に言ふべきことで、宗教界が健全なる活動に富み、政治界の精  
神的基礎となり得るの力があるならば、吾人は精神上の事を一切宗教家に委ねて専ら

政治運動に従ふことが出来ると思ふ。

○所が今の宗教界には、憾むらくは、吾人の全精神を托すべき光明と權威とを發見することが出来ぬ、或者は形式と統計とを立派にするの外に能事無く、或者は新生命を抱いて立つかと思へば極端な主観妄想に陥りて、婦女十目的孱弱に走るか若くは沒常識の孤脱に耽る、又た或者は稍々新元氣を起して活動するかと思へば世俗に阿附し權者に媚びて却て世を過らんとするのである、世界の人類が衷心の鼓動に激せられて絶叫する新要求の聲が、山川林野を壓して響き來るに係はらず、彼等は之に耳を傾けないのである、是れ吾人が自ら其薄信、微力を省みるの暇無く、進んで彼等の領分を侵すに至れる所以である。

(三) 何故に社會革命を叫ぶや

○『汝等、基督教を口にしながら、社會主義など、云ふ物質界の改革に執着するは、是れ僞信者なり』との言に對しては、吾人は自己の薄信を省みて深く愧ぢざるを得

ぬ、乍併、社會主義を叫ぶが故に僞信者なりと爲すは餘りに沒埋ではあるまいか、社會主義は固より物質界の革命を理想するのであるが、併し其の物質界といふものは心生活の表顯ではあるまいか、社會主義は決して資本家組織といふ一の物質を槌や斧で改革しやうといふのでは無い、否な資本家組織といふ一の固形物體は無いので、是れ實は物質の處分方法の形式に過ぎないのである、從て社會主義の主張は唯だ物質の處分方法に革命を加へやうといふに過ぎぬ、而して其處分方法は社會心意によりて定められるのである。

○予は個人の心生活に於て迷妄がある如く、社會（社會は單に個人の集合體にあらず、個人を綜合して別に一個の生命あり）の心生活にも迷妄があると思ふ、而して個人が如何に迷妄より解脱するとも、社會が迷妄に支配せらるゝ間は、個人として解脱したる者も決して絶對の平安を得られぬと思ふ、所謂救濟の心は此の所より起るのでは無いか、社會主義も實に此の社會の心生活に於ける迷妄を打破せんとするものでは

ないか。

(四) 社會主義は自力我慢の説なりや

○世には漫に絶對他力の安心を唱ふる人がある、併し之には深き注意を要すると思ふ、即ち是れは神に對する態度と、社會に對する態度とを分けて考へねばならぬ、吾人が全能至愛の天父に對する場合には無論絶對的に他力に依るの外はない、乍併吾等が神の愛子でありながら、我利我執に陥る如く、社會も亦た神の造れるものながら、我利我執に支配されるのである、されば吾等が其社會的生活に於て、絶對他力的に此る社會に頼るなら、そは却て大いなる我利我執の生活に陥るのである。

○此の故に吾等は對神の生活に於ては絶對他力の安心を祈願すれども、社會的生活の上には到死斯くすることを得ない、否な至愛なる天父に對して絶對他力的信仰を懷く人こそ、眞に社會を改革して其の迷妄を打破せんとするの熱情も起るのではあるまいか、予は或一派の宗教家が社會主義を以て自力我慢の説なりとするを見て、其所

謂他力主義が如何に世を誤るの甚だしきかを恐れずには居られぬのである。

(五) 何故に基督に執着するや

○又た僕は此程、或る先輩から一の質問を受けた、曰く、僕は新佛敎連がナゼ、佛の一字を固執するかを怪むと同時に、君等がナゼ「基督」に執着するかを怪む、それが己れの感情だ(或は一種の方便だ)といふなら、二千五百年主義も亦た是認せねばならぬ、と、是れは誠に尤もな問である、理想から言へば、佛何者ぞ、基督何者ぞ、とも言ふことが出来やう、併し是れは僕としては單に頭の中での理想に過ぎぬ、腹の中から「はヤッパリ『基督!』」といふ叫びが聞ゆるのである。

○頭で考へた理想が直ちに吾が生命となり力となつた積りで、生意氣に社會革新などと叫び出すと、腹の方に力の乏しいことが直ちに分る、マルクスが「革命は哲學者の頭腦と平民の心情とを以てせざれば不能なり」と言ふて居るが、其の「平民の心情」とは即ち腹の力である、「平民の心情」とは即ち「愛」である、「誠の愛」である、吾人社會

に出で、百萬言『愛』を説いても、否な『愛』を説けば説く程、腹の中に『誠の力』の乏しき  
を感じ、不安を感じるのである、自己の小弱淺薄なるを想ふのである、サア、ソ  
コで『基督！』といふ叫びが腹の中心から湧いて来る、而して基督の十字架を頭上に仰  
いで行くと、僕の如き小弱なるものも、僅かに其の威光に隠れて進むことが出来る、  
是れ予に取りては實に退引ならぬ次第にて、世の人、之を憐れむべしと言はゞ一言も  
無い譯なのである。

○或は言ふであらう、同じく他の威光に隠れるなら、ナゼ直ちに神の威光に隠れない  
かと、されど、コ、が凡夫の悲しさである、神は基督の如き方にこそ、直接に十字架  
をも授けたのであるが、吾等如き凡夫は唯だ僅かに基督の十字架を遙か向ふに望んで  
行くに過ぎぬ、吾等は基督の十字架によりて始めて神の慈光に接することが出来るの  
である、併し又た思ふ、其の十字架の威光も實は神の威光ではあるまいか。

(六) 二千五百年主義

○次に「二千五百年主義も亦た是認せねばならぬ」といふは甚だ無理な注文である、人  
が基督を愛し、佛を慕ふは、其心情、其主觀に於て、娼妓が情夫を愛すると違はない  
であらう、乍併、若し之を其理性の内容に於て見る時、又た之を客觀する時は、其の  
大小、其の高下、其の深淺、實に甚だしき差異がある、基督主義佛主義が、其腹に於  
て、其心情に於て、其主觀に於て二千五百年主義に等しと言はゞ、予は之に服する、  
乍併、之が其頭腦に於て、其の理に於て、其客觀に於ても亦た相一致すと言ふなら  
ば、予は斷じて服することが出来ぬ。

(七) 感慨無量

○然るに以上の覺悟に於て、漸く我が心も落着いて行くかと思へば、弱き我は又時に  
堪え難き憂愁に襲はれるのである、讀者諸君、希くは弱き我が誠の心を嘲笑すること  
勿れ、夜、深けて、人、静まり、獨り思ひに我を没するの時、心頭に浮び来る者は實  
に『吾黨の運命』である、予に最も親切なる先輩は此頃懇ろに予に告げて呉れた、『汝の

行かんと欲する道は餘りに狭し、汝は將來、汝が最も愛する日本社會主義者の多數より疎んせらるゝとあらん、蓋し汝が言ふ所は、常に彼等に對する苦言なれば也、汝は又た汝が最も敬する日本基督教徒にも忘まるゝことあらん、蓋し汝が叫ぶ所は、何時も彼等に對する痛極なれば也、汝は遂に多數の同志を得る能はざる可し、勢力と聲望とは亦た汝の道程に於て得らるべきに非ず、されど汝の使命は確かに此所にあり、假令、孤獨を守らざる可らざるに至るも、汝は其の使命に安せざる可らず、嗚呼汝の前途は多難なる哉」と、天性弱き我は思はず涙を忍んで泣いたのである、予、不肖と雖ども、此事業を創むるに當りて多少其覺悟は定めてあつた、されど今ま親切なる先輩の戒を聞きて、無量の感慨の胸に迫き來るを禁じ得なかつたのである、嗚呼、各地の兄弟よ、弱くして意氣地無き予も、政府の迫害や、法律の苛責は左程恐ろしとも思はない、されど若し、吾が左右兩手に相握りたる此の兩面の同志と相背離することありとせば、そは吾人に取りて實に悲痛の極である、されど兄弟よ、使命は總て『彼』より

來る、吾自ら避くべきもので無い、道の難易によりて自ら轉じてはならぬ、親愛なる兄弟よ、希くは此の弱き小人を導きて以て諸君の狭き道を辿らしめ給へ。

(八) 餘記

○吾人が基督教徒として社會主義運動に投ずるに當て、心得べきことは決して之に止まらぬ、乍併、其の總ての事は吾人が常に世に發表する文章と言語とに於て自ら明かなる譯である、上記せし處は、唯だ其の重要な事項にして且つ近時特に人の多く問はるゝ題目に過ぎぬ、讀者諸君希くは諒せよ。(明治三十九年二月十日「新紀元」掲載)



明治三十九年八月廿八日印刷  
明治三十九年九月十日發行

(廿世紀の大覺醒奥付)  
定價金三十錢

郵税四錢



譯者 石川三四郎  
東京市本郷區千駄木九十六番地  
發行者 日高藤兵衛  
東京市神田區三崎町三丁目一番地  
印刷者 山本邦彦  
東京市神田區三崎町三丁目一番地  
印刷所 日本印刷株式會社

發行所

東京市本郷區  
千駄木林町

日高有倫堂

(電話下谷貳五貳八番)



明治二十九年五月卅日印刷  
每月新刊發行の都度増補改刷

東京市本郷區千駄木林町百九十六番地

日高有倫堂

(電話下谷二五二八番)

# 有倫堂出版書目

泉鏡花著

## ななむと櫻

定價金六十錢  
郵税金十錢

朝霞、夕霞、風情なるかな月とともに、櫻かざして歌へ君花の心を汲めや君、いざや、此の七本櫻、千駄木の文の林に、緑を分け、て香ふ也

大町桂月伊藤銀月刪修 伊藤天籟編

## 文士寶典

定價金四十五錢  
郵税金六錢

東西諸文星の名篇玉什を襍め、更に之を嚴密なる審美眼を以て、不朽の文字のみを撰擇し、文勢を保ち、神韻を失はざる、繁簡の適度に於て、緊密に取捨按排し、文士並に文士たらんとする人の爲に、最良なる一巻の完備せる理想的資料寶典を編纂したる者也、之を繙けば、深刻腸を抉ぐる者、天衣無縫なる者、香氣齒頰に湧く者、奇句警語應接に違あらず

饗庭篁村著

## 紀行天下泰平

定價金五十錢  
郵税金六錢

本居豊穎撰

## 紫文摘英

各定價金五錢  
郵税金六錢

源氏物語が千古の大文學たるは今更贅言を要せず而も之を教科書に使用せしむるには餘りに浩瀚に過ぎ又事實上に悖倫の箇處多し女子教育家の齊しく遺憾とするところ源氏博士の稱ある本居先生大に之を慨し五十四帖を通じて其英を摘み猶を去り最も聯絡と校訂に意を用ひ「紫文摘英」を編せらる即ち是れ源語全篇の縮圖にして一讀其大意を窺ふべく併も紫文の妙は此上下二卷に盡くせり各種女學校の良教科書たるは勿論苟も國文學に志あるの士女は必ず一本を備へざるべからず乞ふ高讀の榮を給へ

泉鏡花著○鏑木清方畫

## 無憂樹

定價金八十五錢  
小包料金十錢

著者積年の思を籠めて、はじめより單行一冊として新に筆を取りたるは、此の編を以て嚆矢とす、願くば紳士淑女をして良匠が彫心の經營に成りて、世に美しき戀を秘めたる一大宮殿の裡に遊ばしめむ、

半井桃水著○鏑木清方畫

## 慰問袋

定價金七十五錢  
小包料金十錢

硝煙彈雨の下に在りて勇將猛卒を樂しましめし慰問袋に戰時裏面の材料を收めて治く讀者に分たんとする桃水氏が従軍土産

網島梁川譯 (近刊豫告)

## ルナン耶蘇傳

定價金一圓五錢  
郵税金拾四錢

耶蘇は人類の王也。ルナン其傳を結びて曰く「其教は永へに新なるべく其物語は氣高き眼に涙を溢れしめ其苦みは優しき心を動すべし、世々の後まで人類の中曾て耶蘇より偉いなる者生れずと語り傳へなむ」と。此書救主の生涯、其懐しき神の國の思想、天父の觀念を叙べ、奇跡を論じ、他の宗教との關係を明にし、其國家觀、社會主義觀また此間に隱見す。自由討究の精神一貫して批評の鋭及觸れざる所なく、之がため一時歐米基督教界を震動して顔色を失はしめたりと雖、世界史上に於ける耶蘇の位置は寧ろ之によりて確められたりと言ふべきなり。梁川先生は絢爛瑰麗、現代獨歩の筆を以て此書を繙して世に問はる。世界の認めて耶蘇傳の白眉となすものと摸範的美文とは之によりて吾邦文壇に供へられむとする也。

饗庭篁村著○鏑木清方畫

## 小不問語

定價金七十五錢  
郵税金拾錢

附 大詩人出現 鹽原遊記

泉鏡花著○鏑木清方畫

## 小誓之卷

定價金七拾五錢  
郵税金十錢

これ鏡花先生があふる、ばかりの同情を以て天と地と、人に、訴へて同情を求めたる、初戀の詩篇也。

大町桂月著

## 我が文章

定價金四拾八錢  
郵税金六錢

桂月先生の文章愈老熟して縦横自在眞情流露し行く處に行き止る處に止まり此の街ふ所なく苦む所なく直ちに人を以て文を遣り洒落馳逸快調にして男性的意氣を發揮し而かも言外に情熱溢る文此に至れば聖なり先生の文の如きは、實に當代の逸品なり

文學士 久保天隨著

## 紀行山水寫生

定價金四拾五錢  
郵税金六錢

德田秋聲著

## 小花たば

定價金四拾五錢  
郵税金拾錢

泉鏡花著○鏑木清方畫  
要せず而も之を教科書に使用せしむるには  
餘りに浩漭に過ぎ又事實に悖倫の箇處多  
女子教育家の齊しく遺憾とするところ源氏  
博士の稱ある本居先生大に之を慨し五十四  
帖を通じて其英を摘み猶を去り最も聯絡と  
校訂に意を用ひ「紫文摘英」を編せらる即ち  
是れ源語全篇の縮圖にして一讀其大意を窺  
ふべく併も紫文の妙は此上下二卷に盡くせ  
り各種女學校の良教科書たるは勿論苟も國  
文學に志あるの士女は必ず一本を備へざる  
べからず乞ふ高讀の榮を給へ

新 作 小 無憂樹  
(上製美本)  
定價金八十五錢  
小包料金十錢

著者積年の思を籠めて、はじめより單行一  
冊として新に筆を取りたるは、此の編を以  
て嚆矢とす、願くば紳士淑女をして良匠が  
彫心の經營に成りて、世に美しき戀を秘め  
たる一大宮殿の裡に遊ばしめむ、

新 刊 慰問袋  
(上製美本)  
定價金七十五錢  
小包料金十錢

硝煙彈雨の下に在りて勇將猛卒を樂しまし  
めし慰問袋に戰時裏面の材料を收めて冷く  
讀者に分たんとする桃水氏が從軍土産

近 刊 小 濡衣  
定價金七十五錢  
小包料金十錢

玲瓏たる姉の露子は清き心に月を宿し花を  
飾る妹錦子は卑き胸に穢れを包む此姉妹に  
對照するに附録因果物語戀ゆる仇讐の思あ  
る太郎次郎の兄弟を以てす前者は涙後者は  
血なり

近 刊 小 萩の下露  
定價金七十五錢  
小包料十錢

人間萬事金の世の中に實を見る芥の如き正  
廉潔白の人を寫して讀者の溜飲を下げんと  
する一服の清涼劑なり

再 版 小 十七八  
定價金七十五錢  
郵税金十錢

櫻は三月萬蒲は五月女盛りは十七八げに少  
女は人生の花なり而して少女の可憐なる心  
事と態度とは唯た多情多恨の才子よく之を  
描き多情多恨の才子よく之を愛讀す風葉先  
生の濃情麗筆を味はんと思はるゝ大方の  
君子は請ふこの篇を讀まれよ

再 版 小 觀音岩  
定價金八十錢  
郵稅拾五錢

同○情○豐○富  
思○想○高○逸  
裝○釘○美○麗  
文○致○清○麗  
此○本○書○の○特○色○也

再 版 小 誓之卷  
定價金七拾五錢  
郵税金十錢

これ鏡花先生があふる、ばかりの同情を以  
て天と、地と、人に、訴へて同情を求めた  
る、初戀の詩篇也。

大町桂月著  
五 版 我が文章  
定價金四拾八錢  
郵税金六錢

桂月先生の文章愈老熟して縱横自在真情流  
露し行く處に行き止る處に止まり些の街ふ  
所なく苦む所なく直ちに人を以て文を遣り  
洒落馳逸快關にして男性的意氣を發揮し而  
かも言外に情熱溢る文此に至れば聖なり先  
生の文の如きは、實に當代の逸品なり

文學士 久保天隨著  
紀行 山水寫生  
定價金四拾五錢  
郵税金六錢

德田秋聲著  
小花たば  
定價金四拾五錢  
郵税金拾錢

文學士 小原無絃譯  
原對シエレーの詩  
定價金三拾錢  
郵税金四錢

大町桂月選日高有倫堂編輯部編纂  
新 刊 明治大家文集  
定價金七拾錢  
郵税金拾錢

明治の昭代文運の勃興前古其比を見ず今一  
々諸大家の著作を讀み其風格を知るは容易  
のことにあらずこの書明治三十八年の間論文  
といはず美文といはず小説といはず苟も文  
章を以て一家をなし特色を有せる文豪を撰  
びまた文豪の特色を發揮せる名篇を選び明  
治の文章家は集つて此の書にあり之れ明治  
文學の縮圖にして一讀の下以て明治の諸大  
家の面影を伺ふべく文壇の一大偉觀たるを  
失はず文を學ぶ人によりては以て眞の摸範  
とするに足る有益にして且つ興味ある良書  
也

秋元蘆風譯  
獨 野葡萄  
定價金拾五錢  
郵税金六錢

○原文對照○卷末に評註を附す  
文學士 小原無絃譯  
原文 巴ンスの詩  
定價金拾錢  
郵税金四錢

大町桂月著

### 代表日本人

定價金四拾五錢  
郵税金六錢

日本人を化せしは區々たる教義にあらすし  
て事實也歴史也國體也祖先の發揮せる國民  
性也我が國には儒教佛教以外一種の武士道  
ありて今日の展發を致したる事今更言を待  
たざる所なるが武士道の真相を知らむとせ  
ば理論のみにては不十分也之を人物事實に  
徴せざるべからず此書日本國民の特性の何  
たるかを説き建國以來その特性を發揮せる  
人を選びて其面目を描き日本國民の前路に  
光明を與へ教訓を與ふ一風變はれる日本國  
民の歴史也兼ねて道德經也。

大町桂月先生選

### 第壹時代青年文集

定價金四拾錢  
郵税金六錢

大町桂月先生選

### 第貳時代青年文集

定價金四拾錢  
郵税金六錢

桂月先生最も青年を愛し指導教訓須臾も懈  
らず爰に滿天下青年諸子の傑作數千篇中よ  
り其尤なる者を抜き嚴正なる批評を加へて  
時代青年文集を編せらる收むる所叙事抒情  
あり論說書簡あり將た新體詩あり威な絢爛  
花の如く情熱火の如し以て青年の煩悶を醫  
すべく元氣を鼓舞すべし附録には當代諸大  
家の名篇を添へて錦上更に美花を飾る

大町桂月著

### 家庭と學生

定價金卅八錢  
郵税金六錢

文學士久保天隨著

### 美文 夕紅葉

定價金三拾五錢  
郵税金六錢

細越夏村著

### 靈 笛

定價金三拾錢  
郵税金四錢

姉崎博士序 萬朝報記者茅原華山著

### 改冊五版 向上の一路

定價金三拾錢  
郵税金六錢

大町桂月先生 中内蝶二先生合著

### 六版 少女と山水

定價金參拾五錢  
郵税金六錢

山口先生序 シルレル原著 齊木仙醉譯

### 新刊 接神術

定價金貳拾貳錢  
郵税金四錢

網島梁川著

### 再版 梁川文集

定價金三圓卅五錢  
郵税金拾五錢

上製クロース 頁數約千頁頗美本

山口先生題詩 蘆風秋元喜久雄譯

### 訂正四版 獨逸詩粹 紛紅集

定價 金卅五錢  
郵税 金四錢

萬朝報記者 茅原華山編纂

### 青年と詩吟

定價金貳拾五錢  
郵税金四錢

文科 夏目先生 校閱 チャールス、ラム著  
大學 上田先生 序文 文學士 小松武治譯  
講師 ロイド先生

### 七版 標準 沙翁物語集

定價 金七十錢  
郵税 金十錢

●上製クロース 美本

岩野泡鳴著

### 新體詩集 悲戀悲歌

定價金參拾五錢  
郵税金四錢

高橋五郎著

### 杜伯品藻

定價 金卅五錢  
郵税 金六錢

トルストイ伯の主義人物を評す

海老名彈正先生著

### 再版 基督教本義

上製 金六十五錢  
並製 金五十五錢  
郵税金八錢

齊木仙醉先生譯

### トルストイ教訓小説集

定價金參拾錢  
郵税金四錢

苦學社社輯

### 苦學の伴侶

定價 金參拾錢  
郵税 金四錢

海老名彈正先生著

### 人道

定價 金拾錢  
郵税 金貳錢

加藤直士譯

### トルストイの 日露戰爭觀

定價金參拾錢  
郵税金四錢

再版 美文 夕紅葉 定價金三拾五錢 郵税金六錢

細越夏村著

靈 笛 定價金參拾錢 郵税金四錢

近刊 姉崎博士序 萬朝報記者茅原華山著

向上の一路 定價金三拾錢 郵税金六錢

改五冊版 大町桂月先生 中内蝶二先生合著

少女と山水 定價金參拾五錢 郵税金六錢

六版 山口先生序 シルレル原著 齊木仙醉譯

接神術 定價金貳拾貳錢 郵税金四錢

新刊 文學士 大町桂月先生書翰 木村鷹太郎先生書翰 文學士 上田 敏先生書翰 岩野 泡 鳴 著

新體 夕潮 定價金參拾五錢 郵税金六錢

文學士 大町桂月著

九版 わが筆 定價金四拾五錢 郵税金六錢

嘲罵の中に涙あり放言の中に眞理あり教訓あり才氣あり霸氣あり或は洒脱に或は沈痛に或は眞面目に或は談諧に短くして寸鐵人を刺し長くして萬馬野を走る而かも貫くに一脈の氣と熱とを以てし行るに靈活の才筆を以てす家庭學校社會及び文學等に關する卓見到る處に充ち才情掬すべき美文もその間に光彩を放つ天地間有數の快文字也

大町桂月先生序 角金潮聲著

參版 宇宙と人生 定價金貳拾五錢 郵税金四錢

海老名彈正先生著

宗教々育觀 定價金五拾五錢 郵税金八錢

匿名隱士著

七版 破天人論 定價金參拾錢 郵税金四錢

齊木仙醉先生譯 並製 金五十五錢 郵税金八錢

再版 トルス 教訓小説集 定價金參拾錢 郵税金四錢

苦學の伴侶 定價金參拾錢 郵税金四錢

海老名彈正先生著

人道 定價金拾錢 郵税金貳錢

加藤直士譯

再版 トルスの 日露戰爭觀 定價金參拾錢 郵税金四錢

橫山筆助著

再版 成功した 催眠術 應用自在 定價金參拾錢 郵税金四錢

茅原華山編纂

我と人 定價金貳拾錢 郵税金六錢

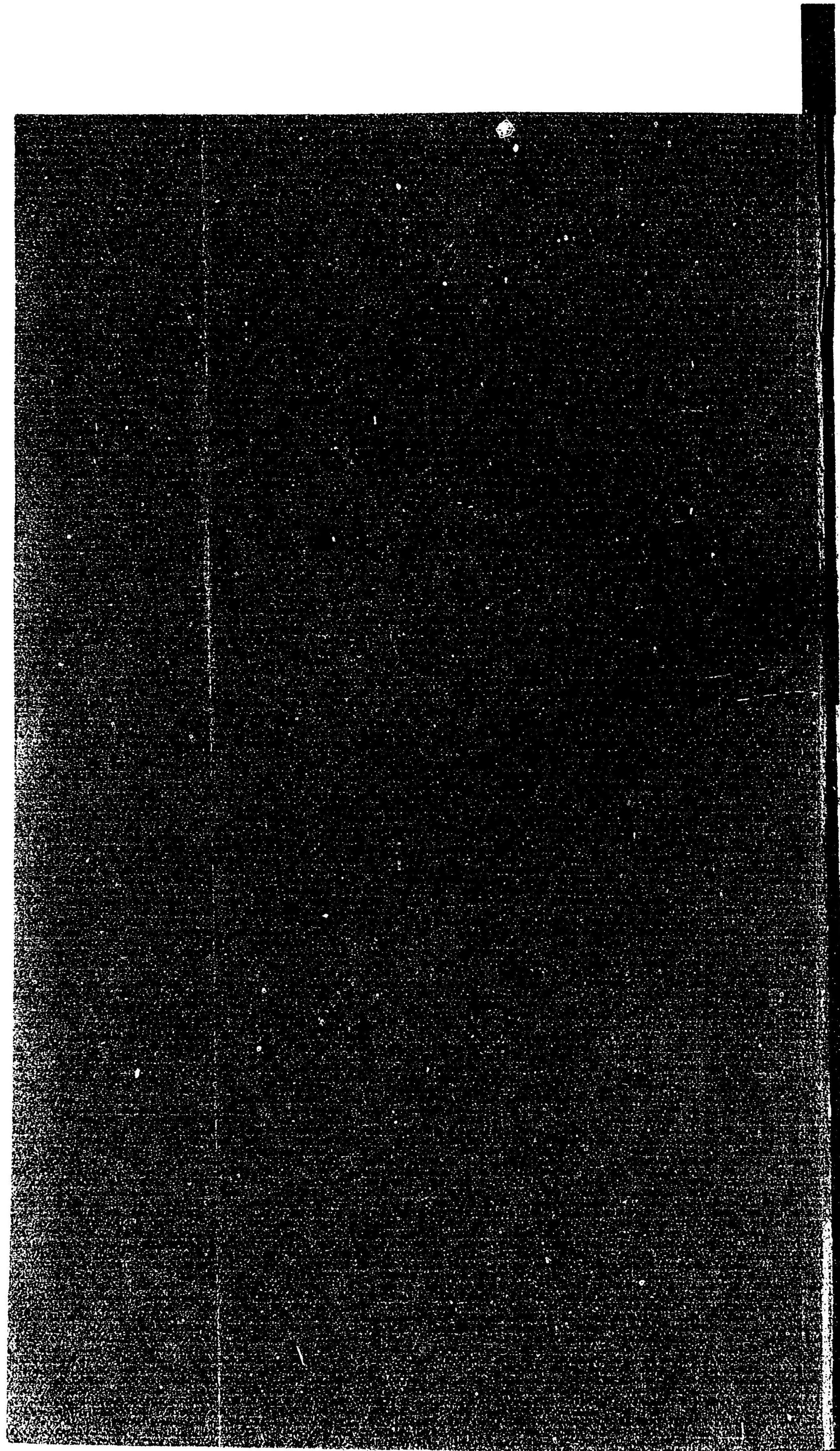
鈴木秋子女史著

軍國の婦人 定價金廿八錢 郵税金四錢

基督教講壇集 定價金七拾錢 郵税金九錢

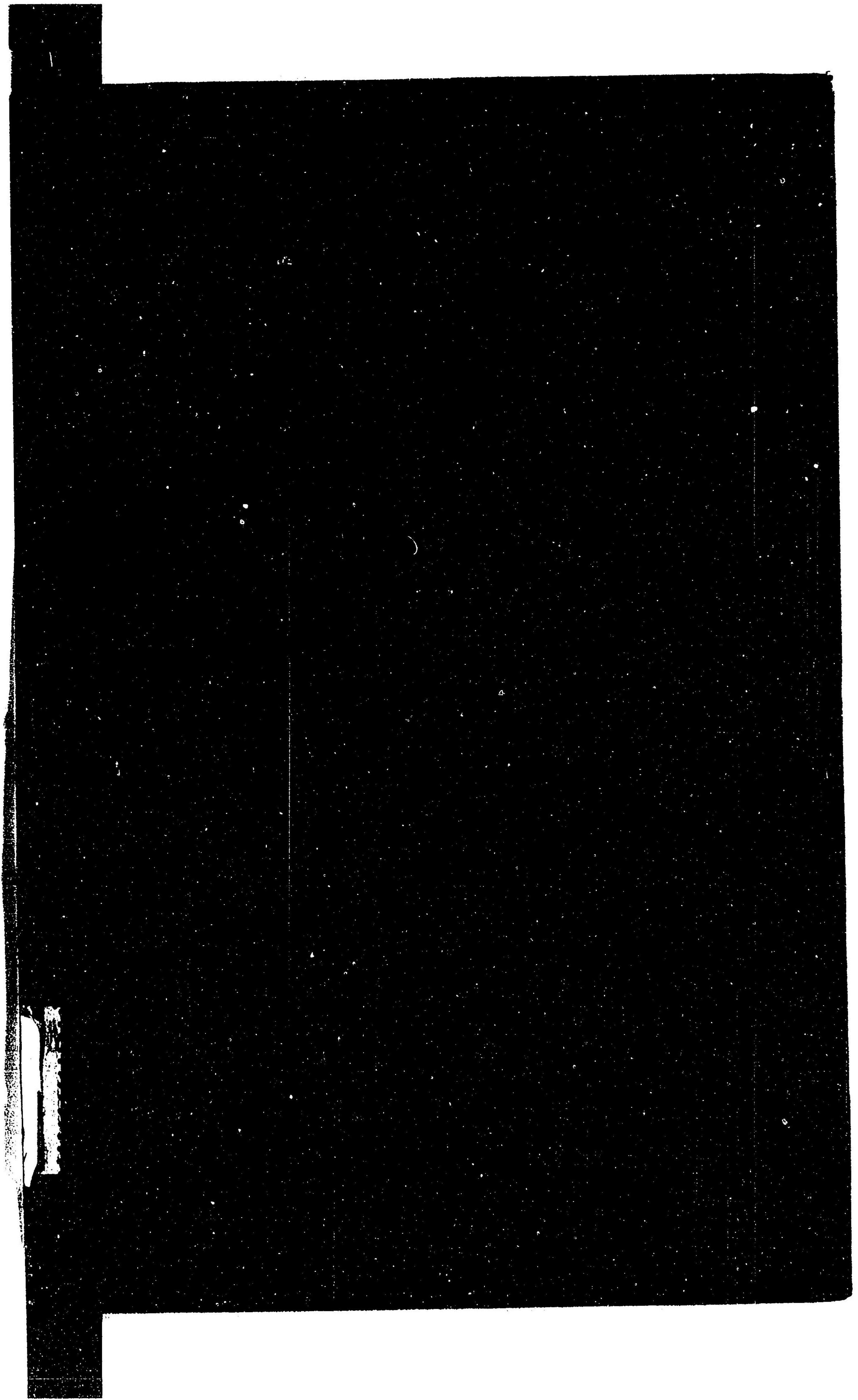
本書は眞に生命の麴匏靈活の根原たる現代基督教界のあらゆる大家の説教を網羅掲載したる雜誌講壇の全部を合し改冊せしものなり居ながら各大家の口演を聴問する好冊子其内容に於ては活水如湧の感あり乞ふ愛讀の榮を給へ 杉山先生書簡 黒譯辰三郎編

日名家手簡 定價金三拾錢 郵税金六錢



30  
462





30  
462

Ⓜ

039669-000-0

30-462

廿世紀の大覚醒

ジョサイア・ストロング / 著

M39.5

BDA-0249



3  
4